新撰國語讀本

昭和二版

卷九

375.9
Sa19
資料室

41519
教科書文庫
4
810
41-1932
200030
1885

文部省檢定濟

昭和七年二月十日　中學校國語漢文科用
昭和八年七月五日　實業學校國語科用

新撰國語讀本

（昭和二版）

卷九

新撰国語讀本

文學博士　佐々政一編
文學博士　武島又次郎
笹川種郎補
杉敏介

資料室
3759
Sa19

廣島大學圖書之印

廣島大學教
26521
圖書

凡例

一、本書一部十卷は、故佐佐政一編「新撰國語讀本」を、最近改正された中學校教授要目に準據して新に補修したものである。

一、本卷は第五學年の前期用たるべきもので、中古以來の各種の代表的作品を網羅した。殊に纏めて最後に掲げた中古文は、前卷所收のものと相待つてその大體を窺ひ得べく、また優雅な祖先の生活に觸れることが出來よう。

一、現代文を除く外は、例によつて助動詞の「む」を「ん」に改めなかつた。

一、所收の各篇は悉く著名の作品で、何れも文章の模範たるべきものである。但し或作品はその全文を掲げることが出來ないで、拔萃したのもあり、一部分を削除したのもある。又文字・辭句も、普通教育上の見地から、多少原作と違へたところもある。此等は總てその篇の終に「による」の三字を添へたが、その責任は勿論補修者の負ふべきものである。

一、作品の採錄に就き快く承諾された各位に對して茲に敬意を表し、併せて種種の注意と助言とを與へられたことを感謝する。

目次

一 禪榻茶話……高島米峰……四
二 受發……幸田露伴……九
三 善と惡……阿部次郎……一四
四 山庵雜記……北村透谷……二二
五 文藝の基礎……厨川白村……二六
六 短き詩歌……三七
七 春夏秋冬(俳句)……四五
八 俳文三篇……松尾芭蕉……四九
一、幻住庵の記……四九
二、最上川……五四
三、銀河序……五四
九 月は世世の形見……室鳩巣……五六
一〇 玉かつま……本居宣長……六一
一、新なる說を出すこと……六一
二、足ることを知る……六二

三、世の物知り人……六三
四、近き世の人の歌文……六四
一一 月の前……上田秋成……六六
一二 東下り……(太平記)……七四
一三 新島守……(增鏡)……七九
一四 方丈の記……鴨長明……八六
一五 大原の奥(その一)……(平家物語)……九五
一六 大原の奥(その二)……(平家物語)……一〇一

中古文選

一 かぐや姫……(竹取物語)……一〇九
二 旅路……紀貫之……一一七
一、宇多の松原……一一七
二、歸家……一一八
三 須磨の浦波……紫式部……一二二
四 けづり屑……(大鏡)……一三〇
五 心の花(和歌)……(古今集)……一三四

一　禪榻茶話

行住坐臥も禪、語默動靜も禪、喫茶も禪、喫飯も禪、吾人の日常生活すべてこれ禪にして、必ずしも山林に逃避して樹下石上に靜慮するのみが禪なるにはあらざるなり。既に日常生活卽ちこれ禪なるが故に、禪は畢竟尋常なり、平凡なり。

然るに、この尋常・平凡の禪門、却て電掣雷擊的の變化に富み、驚心愕目的の奇行多きは何ぞや。曰く、物に凝滯せず、事に拘泥せざるがためのみ。ただ後世の野狐精、先德悟徹の芳躅を摸倣することを知つて、その本分を會せず、徒に喝し、徒に棒す、寧ろ笑ふべきなり。

由來、禪門には奇行甚だ多し。未だその人の奇なるがためなりや、はたその境の奇なるがためなりやを識らずと雖も、釋尊拈花して

（一）釋尊の高弟。或日、釋尊が蓮華を拈つて微笑したが、大衆はその何の意味であるかを知らなかつたのに、獨り迦葉は能く佛意を悟つて微笑したといふ。

（二）名高い禪僧。正保二年（一六四五）寂、年七十三。

迦葉微笑すといふこと已に奇なり。或は曰く、「これを奇とするは凡人の見、その人その境に到らば、卽ちこれ平山凡水、澤庵でお茶漬をかつ込むが如く然るのみ。」と。それ或は然らんそれ或は然らざらん。試みに三四の事例を擧げんか。

德川家光、品川東海寺に澤庵和尙を訪ふ。突如として問うて曰く、「海近くして東（遠）海寺とはこれ如何。」澤庵聲に應じて曰く、「大君を將（小）軍と言ふが如し。」と。凡そこの類の問答、古來少なからず。「一個にして饅（萬）頭といふは如何。」「一枚にして煎（千）餅といふが如し。」の如き、實はこれ禪門の眞面目にあらず、寧ろこれ玩弄禪なり、墮落禪なり。澤庵婆心に過ぎ、この餘技を弄びて却て俗人を誤る。座に雛僧二人あり。家光これを試みんとして遙かに海上を去來する白帆を指し、「汝等、かの舟を止め得るか。」と問ふ。甲は起ちて障子を閉ぢ、乙は寂然と

(一)名は安芳。明治三十二年歿。

(二)天保二年（一八三一）寂、年六十。

(三)高僧。博多聖福寺の住持。天保八年寂。

してその眼を閉づ。家光感歎これを久しうせりといふ。惜しむらくは、雖僧ともに未だその心扉を鎖すを知らざることを。

(一)勝海舟、維新當時、幕臣のために憎まれ、刺客常に身邊を窺ふ。一日騎して行く。一士銃を執りてこれを狙ふものあり。海舟瞥見して、直にその士を指し、大聲これを叱して曰く、「汝の狙ひ誤れり。如何ぞ我を斃し得ん。」と。士驚きて逡巡す。海舟乃ち悠然として過ぐ。所謂機先を制し得たるもの。劒禪一味の境に悟徹せる者にあらずんば則ち能はず。

近世、禪門に於て、書は良寛(二)を推し、畫は仙崖(三)に服す。仙崖また狂歌を能くして、頗る洒脫の風あり。信者あり、別莊を築きて祝宴を張り、和尚を請じて揮毫を乞ふ。和尚快諾して筆を執り、まづその別莊の圖を描き、その上に贊して曰く、「この家を貧乏神が取卷いて。」主人これを見て不吉となし、色を作して和尚に迫る。和尚、破顏一番、更に筆を下して曰く、「七福神の出どころもなし。」驟雨一過して涼風堂に滿つ。

(四)三緣山增上寺の學頭となり、後に弘經寺の住持となつた人。

(五)茨城縣結城郡にある地名。

梅癡(四)和尚は、淨土門の人にして、而も頗る禪機あり。梅を愛すること深く、自ら梅癡と稱す。曾て飯沼(五)の弘經寺に住したる時、伽藍の普請をなす。官寺の故を以て、幕吏來りてこれを監督す。一日、吏俄に謁を和尚に請ふ。曰く、「小吏、今、庫裏の床下を檢したるに、魚骨散亂して狼藉を極む。山內に必ず破戒の僧あらん。嚴にこれを糾彈せられんことを。」と。和尚、莞爾として曰く、「今時の雛僧、その齒の弱きこと、何ぞそれ斯くの如きや。衲等若かりし時、食ふに魚の頭と骨とを擇ばず、これを以て斯くの如きの醜を他に暴露すること少なかりしなり。」と。吏、啞然として言ふ所を知らず。後、和尚密かに大衆に告げて曰く、

「衲、汝等を救はんがために、殊更に破戒の言をなす。汝等もし心あらば、懺悔して、また犯さざれ。」と。慈訓懇到、慈母の赤子に於けるが如し。衆皆感激慟哭して、その罪を謝したりといふ。甘露の法雨沛然として到り、枯木死草一時に蘇生す。

雪潭和尚、犬山瑞泉寺の請に應じて「臨濟錄」を提唱す。時に犬山侯また臨みて簾を垂れて聽講す。雪潭講座に上り、大喝して曰く、「咄、何者の無禮漢ぞ、簾中に坐して講を聽くか。雪潭の說法に毫末の秕糠なし。何ぞ敢て篩を用ふるを要せん。」と。侯大いに悔い、簾を捨てて謝す。電掣雷擊の後、天地おのづから清明。ただ禪門の末徒、猥りに人を罵るを以て禪機となさば、雪潭が法を重くする所以に徹することを能はざるなり。（高島米峰著「思ふまま」による）

（一）禪僧。美濃の正眼寺に住す。明治元年寂、年七十三。
（二）愛知縣丹羽郡犬山町字內田にあり、禪宗妙心寺派に屬する寺。
（三）一卷。支那唐代の高僧臨濟禪師の語錄。

高島米峰　評論家。東洋大學出身。

二　受發

大丈夫苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫底の覺悟あるを要す。受とは內の外に受くるなり、發とは外に內の發するなり。受くることは須らく大海の百川を呑むが如くなるべし。發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことをこれ嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず。發することの豐かならざらんことをこれ恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫底の覺悟とす。受くるに嫌ふ所あり、發するに問ふ所あるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり。發は受の末なり。途は二にして實は一、受を能くすれば發はその中に在り。大賢は能く受く。中才は勤めて克く受く。

賤人は好んで受くるあり、敢て受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦する者は、學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫底の覺悟なき者は、爲すにだに堪へざらんとす、何ぞ成ることあらん。

士の身を學藝に委ぬる者誰か生を終ふるまで人の批評を被らざる者あらんや。我思ふ所あり、言ふ所あり。人も亦思ふ所あり、言ふ所あり。我わが口を箝して人の言に就くことを難しとせば、人をして其の舌を結んで我が意に從はしめんとするも、亦甚だ難からずや。所謂批評なるものの我に加へらるるや、堯舜の聖と雖も、亦これを如何ともするなし。況や我の身死し、肉爛るるも、日に新に、批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起簇出せんも、亦未だ知るべからざるをや。この故に平家の切禿の徒勞に屬せしを聞き

*湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。（大學）

て、未だ秦王の暴政の能く奏功せしを聞かず。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し褒を愛して、毀を惡み貶を惡む。ここに於て毀譽褒貶の我が頭上に加へらるるや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし堂堂たる六尺の身、他人の籤弄する所となり了れるを悟らず。人を飆風にし、我を粃糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑〻又學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈に斯くの如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む。淸も亦辭せず、濁も亦辭せず、日に默默たり、洋洋たり。而して漸く我が大を成し、徐に我が大を用ひ、日に活潑潑たり、圓陀陀たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる、亦かくの如し。精雜密疎の說、毀譽褒貶の評、皆一齊に之を受けて擇ばず、ただ片言隻

語も、我が知非の鑑、修治の因たるべきものの、我をして日に進ましむるあらんことを願はざることなし。古人まことに斯くの如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。

この故に、學藝に志す者は、能く外に受くる大賢の如くなる能はざるも、勤めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疎は牙婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。假令滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り血涌き、劒を拔いて直に報いんと欲するに至るも、また先づ牙關を咬定して隱忍し、頭を垂れ心を虛しくする底の工夫裏より、一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟といふ。人貶すれば便ち受けずして口嘮噪地に胡言亂說

（一）牛溲馬勃、敗鼓之皮、俱收並蓄。（韓愈「進學解」）

し、人讚すれば便ち默受して欣欣たる如きは、閨閤の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。學藝に遊ぶ者は當に反求の功に賴るべし。漸く深造するあらん。ただ反求の功に賴る、則ち揚げらるるも自滿せず、抑へらるれば愈〻奮ふに足らん。

大丈夫まさに、受發の二途に於て、大丈夫底の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、「能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん。」と。書を著して美とせられず、內に求めずして人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我豈に人の勝つことを好むを陋とするのみならんや、我又實にこれを愧づ。傲はんかな海や、百川それ海を如何せん。（幸田露伴著「讕言」による）

（二）孔子の孫。「中庸」を作る。

幸田露伴　文學博士。小說家。名は成行。嘗て京都帝國大學講師であつた。現に帝國學士院會員。

三　善と惡

凡ての人には善心と惡心とがある。世界には、純惡の人が存在しないと等しく、純善の人も亦存在しない。――これは改めて言ふまでもない凡常な眞理である。我等は固よりこの自然主義的眞理に就て多くの抗議すべきものを持つてゐない。併し、この一つの眞理は、我等の善惡に關する考察の全局に對して、どれほどの意義を持つてゐるか。我等は我等の實際生活の上に、この一つの眞理から、どれだけの結論を導いて來ることが出來るか。自分は、この點に就て明瞭な意識を缺いてゐるために、この自明の眞理によつて却て恐るべき誤謬に導かれた多くの人を見た。故に、自分は此等の人人のために、この一つの眞理から正當に導き得べき結論と、正當に導き得べからざる結論とを區別せんとする欲望を感ぜずにはゐられない。

正當に導き得べからざる結論から始めれば、第一に、我等はこの一つの眞理を根據として、善惡無差別を主張することは出來ない。一人の人格の中に善もあり惡もあるといふ言葉は、既に善惡の差別を豫想するものである。善惡の差別を豫想せずに、人性に於ける善惡の混淆を云云するは無意味である。故に、凡ての人に善心と惡心とがあるといふ一つの事實は、惡を去り善に就かねばならぬといふ、良心の負荷を輕減する理由とはならない。寧ろ人性は善惡の混淆なるが故に、惡を去り善に就く義務は一層痛切を加へるのである。

第二に、我等はこの一つの眞理を根據として、善人惡人無差別を主張することも亦出來ない。人性が善惡の混淆であるといふ事實

は、言ふまでもなく、その間により善いものと、より悪いものとの差別があることを否定するものでもなく、又人がより善くなりより悪くなることが出來るといふ事實を否定するものでもない。人にはその素質上既に善人と悪人との比較的差別がある。而も後の條件を考慮の中に入れる時、我等は更に善に向ふ心と、悪に向ふ心と、その方向の上に截然たる對立を認めずには居られない。假令二人の人がその素質に於て同等であり、その善悪混淆の度に於て等量であると假定してもその志す所の相違によつて、全然反對の方向をとることも亦あり得るのである。故に、我等はその意志の所在により、その努力の方向により、その人格生活の焦點によつて、善人と悪人との間に隨分本質的な境界を劃することも亦出來る筈である。茲に二人の人があつて、共に同樣の罪過を犯し、共に同樣の過誤

を重ねたことがあるとしても、これを恥ぢると恥ぢざると、その過を改めんとするとその非を遂げんとすると、この兩樣の態度の差別によつて、人格の善悪を判ずることは決して不可能のことではない。故に、我等は凡ての人に善心と悪心とがあるといふ事實を根據として、善人と悪人との差別を破壞することも亦出來ない。カント*以來いひ古されたやうに、善人とは善き意志である。善き意志によつてその素質の悪を淨煉し、善に向ふ努力によつて善に協ふ本質を獲得したものである。之に反して、悪人とは悪き意志である。その無恥なる悪の主張によつて、素質の悪を更に倍加し行く者である。茲に同一の空間を相前後して經過する二つの矢があつても、その方向が相反する時、その運命も亦全然相反せずには居られない。善人と悪人との差別はかくの如きものである。

*Immanuel Kant.
(1727—1804)
ドイツの哲學者。

かくの如く、善惡の差別を廢し、善人惡人の區別を棄て、善の主張を無意義にし、惡に甘んずることを敎へることが、善惡混淆の人性觀から正當に導き得べき結論でないとすれば、この一つの眞理が我等の實際生活の上に正當に與へ得べき結論は何であるか。それは第一に、自己の善を輕信することの警戒である。惡は我等の素質の奥に深くその根を下して、容易に刈除することが出來ない。善良な動機から出た善良な行爲さへ、微細にこれを解剖すれば、惡き動機とからみ合つてゐる。善き人となることは如何に難きか。根柢から淨めらるることは如何に稀有であるか。我等は深くこの事を意識して、自ら好い氣になることを戒めなければならない。

第二に、それは他人に對する寬容を敎へる。世に純善の人がないとすれば、我等は輕輕しく他人に絕對善を要求すべきではない。さ

（一）「新約全書」約翰傳第八章に見える基督の言葉。

（二）Pharisees. 基督時代に於けるユダヤ人の黨派の名。

うして、世に純惡の人がないとすれば、我等は凶惡無慚の徒の中にもなほ本性の善を認めて、これを助成することを努めなければならぬ。我等は我等自身が決して純善の人でないことを記憶して、他人に善を責めるにも、なほ身の程を忘れぬやうにしなければならない。我等が凡ての人に善心と惡心とがあるといふ事實から、最初に引出さなければならぬものは、「汝等のうち罪なきもの、先づその女を打て。」といふ基督の戒である。

要するに、我等がこの一つの事實から導き出すことが出來るものは、自己の善を輕信しないといふ意味に於ても、他人の罪過を無慈悲に責めないといふ意味に於ても、共に最も直接にパリサイの徒に當るものである。然るに、無恥なるパリサイの徒は、彼等とは正反對の位置に立つこの一つの事實を、僭越にも却て自己防禦の用

に供する。彼等は、――この事實によつて自己反省と他人に對する寛容とを學ぶことを知らざる彼等は、唯自己の不善を責めらるる時、その不善を辯護するために、世に純善の人がないといふことを持つて來るのである。併し、このやうな自己辯護が彼の人格に就て如何なる證明を與へることになるか。落著いてその意味を省思すれば、彼等と雖も赤面することを禁じ得まい。他人の不善を口實にして自己の不善に甘んじ得るほど求善の心弱きか。他人に對して提出する要求を以て自己を律せんとすることを解せざるほど輕薄であるか。世間の前に不當に自己を正しく見せんとする虛榮心に驅られて、眞實の前に潔く頭を垂れることが出來ないほどに浮誇であるか。――三つのうちの孰れかでなければ、この恥づべき自己辯護を公言することが出來る筈がない。

「汝は他を責めること嚴酷に過ぎる。」といふ非難に對する正當の自己辯護は、「自分は嚴酷に他人を非難する資格があるほどに正しい。」といふことでなければならぬ。さうして、「汝は不善である。」といふ非難に對する正當の自己辯護は、「否、余は不善ではない。」といふ主張ばかりである。世に純善の人がないことを理由として自己の不善を辯護するが如きは、要するに、尾を卷いて逃げながら吠える犬のさもしさに過ぎぬ。殊に、他を非難する時、「余はこれを敢てして恥づるところなき正義の士である。」と揚言した者が、逆に自己の不善を責められる時、世に純善の人がないといふことを以て遁辭とするが如きは、實にさもしさの最も近づくべからざるものである。

重ねて年少の諸友に告げる。――「汝等、パリサイ人の麵麭種を愼めよ。」*（阿部次郎著「三太郎の日記」による）

*新約全書馬太傳第十六章に見える基督の言葉。

阿部次郎　倫理學者。東京帝國大學文學部出身。現に東北帝國大學教授。

四　山庵雜記

○

夢見まほしやと思ふ時あやにくに夢のなきことあり。夢なかれと思ふ時うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時また斯くの如し。思はざらんと思ふに思ひ、思はんと思ふに思はず。さりとて、意の如くならぬをば意の如くせましと思ふにもあらず。靜かに傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意のままにならぬものぞなき。徐ろに咲き出でなん花を待つによろづ心に任せぬものぞなき。如意却て不如意、不如意却て如意、悲しむも何かせん、歡ぶも何かせん。「無心」を傭ひ來つて、悲しみをも歡をも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂しみは來るなれ。

○

早曉臥床を出でて心は寤寐の間に醒め、意は意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我天涯に遊び、忽として我塵界に落つるの感あり。我に返りて後その聲を味はへば、凡常の野雀のみ。さるも、我が得たる幽趣は、地に就けるものならず。爰に於て私かに思ふは、感應我を主として他を主とせざるを。

○

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てよりも靜默冥坐する時に於て燦爛たる光明あること多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往往にして文章を事とするを喜ばず文字の賊とならんより心中の文章に甘んじたればならん。

○

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども、苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとする、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るるにあらざれば、詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ。

○

他を議せんとする時尤も多く己の非を悟る。頃者激する所ありて、生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終りて靜かに內省するに、人を難ずるの筆は同じく己を難ぜんとするに似たり。是非曲直輕輕しく判じ難し。如かず、修練鍛磨して、叨りに他人の非を測らざることを努むるに。

○

(一)William Shakespeare. (1564—1616) イギリスの劇詩人。

(二)Thomas Carlyle. (1795—1881) イギリスの歴史家・文學者。

北村透谷 文學者。名は門太郎。神奈川縣の人。早稲田專門學校に學んだ。明治二十七年歿、年二十七。

「龕く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁(一)の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば、物として定運なきにあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か喞つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし、物外・物內、何すれぞ悟達の別を畫かん。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

○

大なる「悔改」は又一個の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし。」とはカーライル(二)に聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは、信仰に入るの要諦にして、罪人の必ず自殺すべしとせざるは之をもてなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るるを得べし。忘れたる重荷は何時までも重荷なり。悔改の生涯は卽ち信仰の生涯なるか。（北村透谷著「北村透谷集」による）

五　文藝の基礎

鐵石相打つ處に火花が散る如く、奔流岩に堰かれる處に飛沫が虹霓をなすと同じく、二つの力の衝突する處に、美しく華やかな人生の萬華鏡、生活の種種相が展開される。方向を異にした二つの力が相觸れ相打つ葛藤がなければ、我等の生活、我等の存在は、根本に於て意義を失ふ。生の苦悶あるが故に、又戰の苦痛あるが故に、人生には生きがひがある。かの權威に屈服し、因襲に束縛せられて、羊の如くこれに甘んずる醉生夢死の徒などの、未だ曾て感得し味到し得ざる心境、卽ち人生の深い興趣は、要するに强大な二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱の所產に外ならない。私は文藝の基礎をも、この點に立つて解釋すべきであると思ふ。さらば、人生に於ける二

つの力の衝突とは何か。

電光の如く、奔流の如く、驀地に、殆ど盲目的に突進して已まない生命の力を以て、人間生活の根本と見ることは、近代思想家の多くが一致する所である。凝固停滯を厭ひ、苟合屈服を避け、自由解放を求めて已まない生命の力は、意識的にも亦無意識的にも、絶えず內より我等の心胸を熱しつつ、その奧深くに烈火の如くに燃上つてゐる。この炎炎たる力を外から十重二十重に蔽うて、巧に全體を運轉させてゐるのが、卽ち我等の外的生活であり、經濟生活であり、又社會といふ有機體の一員としての生活である。

我等の生命は、天地萬象に普遍な生命である。併しこの生命の力が、或個人に宿つて、その人を通じて現れる時、それはやがて個性となつて活躍する。內に燃える生命の力が個性として發揮される時、

即ち人人が自己の個性を表現しようといふ內的要求に迫られて動く時、そこに眞の創造の生活がある。故に、自己生命の表現は個性の表現であり、個性の表現は創造の生活であると言ひ得る。人間が眞に生きるといふこと、換言すれば生の喜といふものは、この個性の表現、創造の生活をする處にこそ見出されるのである。社會全體から見ても、各個人銘銘に自分の個性を十分に發揮するのでなければ、眞の文化生活は成立たない。

かくの如き意味に於ける生命力の發動、即ち個性表現の內的要求は、我等の靈と肉との兩方面に於て、種種の生活現象となつて現れる。即ち、時にそれは本能生活となり、遊戲衝動となり、或は强烈な信念となり、高遠の理想となり、學徒の知識欲となり、又英雄的征服欲ともなる。更にそれが哲人の思想活動となり、詩人の情熱・感激・憧

憬となつて現れるが如き場合には、最も强く、最も深く、人類を動かすのである。

但し、人間の生活は決して單純ではない。自由不羈を求める生命力をして、十分に飛躍せしむべく、又思ふままに個性を發揮せしむべく、我等の社會生活は餘りに複雜であり、人間その物の本性も亦餘りに多くの矛盾を內に包藏してゐる。殊に近代社會の如く、制度・法律、その他のあらゆる機關が完備し、又一方には生活難といふ脅威が存在する以上、我等は意識的にも無意識的にも、この抑壓から脫する譯には行かない。かくの如く內に動かうとする個性表現の欲望があれば、これに對して外から絕えず社會生活の束縛强制が迫る。此等の內外二つの力の間に苦悶を續けて行く狀態が即ち人間生活である。

併し、以上の言は、單に自己と外界との關係からのみ言つたもので、二つの力の衝突が、必ずしも單に自己の生命力と外部からの强制抑壓との間に起るとのみは言はれない。人間は既に自己その物の內に、互に矛盾した要求を持つてゐる。例へば、私どもは飽くまで個人として生きたいといふ欲望を持つてゐながら、同時に家族とか、團體とか、社會とか、國家とかいふものにも調和して行かうといふ欲望を持つてゐる。一方に自由に自己の本能を滿足させたいといふ欲求があると共に、他方にはさういふ本能を抑壓しようといふ欲求をも抱く。假令外部からの法則や因襲に縛られずとも、自己の道德によつて自己の欲求を制抑しよう規律しようとするのが人間である。その一方を生命力であると言ふならば、他の一方も亦やはり生命力の發現に相違ない。かくして、精神と物質、靈と肉、理想と現實との間には、絕えざる矛盾があり、不斷の葛藤がある。故に、生命力が旺盛であればあるほど、この不調和、この葛藤は、激烈であるのが當然である。

かくの如き相反する力の葛藤は、內的生活に於ても、外的生活に於ても、古往今來總ての人間が經驗する所の苦悶である。この苦悶に堪へないで、自暴自棄に陷るか、或は絕望の極、生を否定し去つて自殺するものの場合の外は、人間は總て何とかしてこの苦悶に打勝ち、この混亂を切拔けて突進しようとする。かくして、私どもの生命力は、宛ら岩に堰かれる奔流の如くに、淵をなし、瀨をなし、瀑をなして、紆餘曲折した行路を取らざるを得ない。或は、馬を陣頭に立てて、雲霞の如き敵の大軍を蹴散らしつつ、勇往猛進する勇士の如き辛酸をも嘗めるのである。そこに生きんとするの努力があると共

に、人生の興味も亦生ずる。より良い、より高い、より自由な生活を創造すべく、人は不斷の努力を續けてゐる。だから、生きるといふことは、何等かの意味に於ての創造である。工場に働くのも、事務所で仕事をするのも、野に耕すのも、市に賣るのも、皆等しく自己の生命力の發現である以上、程度こそ異なれ、何れも創造生活であることは否定されない。併し、其等の種種な生活活動の中で、絶對無條件に純一無雜な創造生活を營む世界がここに只一つある。それは卽ち文藝の創作である。

文藝は純然たる生命の表現である。外界の抑壓强制から全く離れて、絶對自由の心境に立つて個性を表現し得る唯一の世界である。名利を忘れ、一切の羈絆制縛から放たれて、そこに始めて文藝上の創作は成立するのである。ただ自己の心胸に燃える感激と情熱

とによつて、天地創造の朝、神がなしたのと同じ程度の自己表現を行ひ得る世界としては、獨り文藝があるのみである。換言すれば、人間が一切の虚僞や苟合などを棄てて、純眞に生きることの出來る唯一の生活は此處に在る。文藝が人間の文化生活の最高位を占め得る所以は、實にこの點に在る。これに較べると、他の總ての人間活動は、皆吾吾の個性表現の働を多少とも減殺し、畏縮させるものだと言つても差支ない。然らば、私が前に述べたやうな、抑壓から來る苦悶懊惱と、この絶對創造である文藝とは、果して如何なる關係に立つのであらうか。

常に自由を求め解放を求めて已まざる生命力、個性表現の欲望、人間の創造性を强調しようとする傾向は、最近思想界の大勢である。これは、人間は自然の大法に左右され、機械的法則にのみ支配さ

れて、身動きの取れないものだと考へてゐた舊思想に對して、自我と個性とを貴ぶ近代的精神が頓にその勢を得て、ここに人間の自由創造の力が高調された結果だと思ふ。さうして、既にこの生命力この創造性を肯定する以上、私どもは、この力が、それと反對の方向に働かうとする色色の力との間に生ずる衝突を以て、人間苦の根柢なりと見做さざるを得ない。現に私どもは、朝に夕に、この二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱を經驗してゐる。換言すれば、私どもが生きてゐるといふことは、卽ちこの戰の苦惱を繰返してゐるといふことに外ならない。生活が深ければ深い程、生命の力が籠つてゐればゐる程、この苦惱は益〻烈しいのである。さういふ苦惱を經驗しつつ、多くの悲慘な戰を敢へてしつつ、人生の行路を進み行く時、私どもは或は呻き叫び、或は怨嗟し號泣すると共に、時にまた戰勝の光榮を歌ふ歡樂と讃美とに自ら醉ふことさへ稀ではない。さうして、その放つ聲こそは、やがて私どもの文藝である。痛手を負ひ、血みどろになつて、悶えつつも、また悲しみつつも、諦めようとして諦め得ず、思ひ止まらうとして思ひ止まることの出來ない程に、強い愛慕執著を人生に對して持つ時に、人間の放つ呪咀・憤激・讃歎・憧憬・歡喜の聲こそは、卽ち私どもの文藝ではないか。かくの如き意味に於て、文藝は人類が眞善美の理想に向つて向上の一路を辿り行く生命の行進曲であり、また進軍の喇叭である。朗朗として響き渡るその聲が、天地を貫き、百代を動かす威力を持つ所以は、ここに在るのだ。

人生は戰である。地上に生を享けたその第一日、否その最初の第一瞬から、既に吾吾は戰の苦惱を經驗してゐる。美の快感だの、趣味

だのといふ、極めて消極的な暢氣な考で文藝の基礎を解釋し得たのは、過去のことだ。文藝が若し俳茶の筵に過ぎないか、花鳥風月の樂しみであるか、或はお姫樣の慰みにする綺麗事であるならば、いざ知らず、苟も文化生活の最高位に立つ人間活動であるならば、やはりその根柢を生命力の躍進に置いて解釋するより外に道はない。私は、文藝上に、ただ美しいだの面白いだのといふ快樂主義的藝術觀を、飽くまでも排斥したい。殊に、暢氣に遊んでゐては暮せない現代に生きる人の文學に於て、痛切にこれを感ずる。甘い情話式のもの、不良兒の惡戯日記、文士生活の樂屋落、若しこんな物のみがわが文壇を横行するならば、それは疑もなく我等の文化生活の禍である。文藝は斷じて俗衆の玩弄物ではなく、嚴肅にして然も沈痛なるべき人間苦の象徵であるからだ。（厨川白村著「苦悶の象徵」による）

厨川白村　文學博士。名は辰夫。京都府の人。東京帝國大學文學部出身。京都帝國大學教授。大正十二年歿、年四十四。

六　短き詩歌

日本の文學史が長篇の詩歌に乏しきは、固より慶事と言ふべからず。しかも、その所謂詩歌が專ら短小なる形式なりしがために、僅に文字あるものは皆これを弄ぶことを得たるは、日本國民の文學的嗜好の流布に對して、尠からざる效果を與へたりと言はざるべからず。試みに思へ、藤原・奈良の古より、梅が枝かざす大宮人は言はずもがな、東夷僻遠の民なほかの東歌になつかしき情懷を寓せしも、すべて五句の短歌といふ形式が流行せしの致すところならずや。平安の朝に及んでは、依然たる短歌の流行も、なほかの歌詞に高古の弊を生じて、漸く中流以下の人人を和歌以外に置きし憾なきにあらずと雖も、世世の細民の歌謠が街衢吠畝の間より出でて、往

往敕撰に列するの榮をさへ得たるは、なほ短詩形の力にあらずや。啻に然るのみにはあらず、假に萬葉時代の四民がすべて歌謠を弄するを得たるは、未だ分業の發達せざりし時代の現象とせんも、文化既に見るに足るべき平安朝に至つても、なほ歌人と稱するものはすべて朝廷の官人、作歌のことはすべて公務の餘業にして、その特別なる專門家を生じ、師傳口授のこと起りしは平安朝の末期に屬するのみならず、歌を作ることは當時の貴紳としての必然の教養として數へられたりしが如きは、皆これ詩形の短小なりしに歸せざるべからず。萬葉時代は長歌の最盛期なりき。しかも、若し長歌のみを以てすれば、巧妙を以て稱し得べき作者は、人麻呂・赤人・憶良・家持・旅人・蟲麻呂などの外、そも幾人をか算し得べき。短歌を外にせば、萬葉時代もなほ四民皆歌壇の人なりしとは言ふべからざるな

（一）荒木田氏。天文十八年（一五四九）歿、年七十七。
（二）山崎氏。天文二十二年歿、年八十九。
〔參考〕右の二氏は俳諧の祖と稱せられる。
（三）後水尾天皇の御代の年號。（一六二七—一六四四）
（四）松永貞德を祖とする一派の俳風。因に、貞德は承應二年（一六五三）歿、年八十三。
（五）西山宗因を祖とする一派の俳風。因に、宗因は天和二年（一六八二）歿、年七十八。
（六）松尾芭蕉を祖とする俳風。
（七）芭蕉の弟子の其角の起した一派の俳風。
（八）芭蕉の弟子の支考の開いた一派の俳風。
（九）光格天皇の御代の年號。（一七八四—一八四〇）因に、その頃の俳人として最も傑出したのは蕪村・蓼太などである。
（一〇）仁孝天皇の御代の年號。（一八四四—一八五四）その頃最も有名なのは蒼虬・梅室などである。

り。

平安の末葉、大綱弛廢してより、源平亂麻の時、北條勤儉の世、四民は又優遊吟哦を事とする能はざりしなり。されど、その小康に乘じて連歌の生るるや、又短小なる詩形を連續するものなりしが故に、直に無學なる武士・細民に歡ばれ、吉野朝時代に於ては、酒飲み連歌することが田舍漢の普通なる遊宴としてさへ數へらるるに至りぬ。足利期の地下連歌の流行は言を待たざるべし。降つて、守武・宗鑑が俳諧、元和偃武の昌運に乘じて遂に貞門となり、談林となり、更に蕉風となり、江戸座となり、美濃派となり、天明の復興となり、天保調の流行となり、他面に於ては前句附となり、川柳點となり、武門に入り、商家に入り、俳優・幇間、皆俳名を有し、床屋・脊屋、悉く點取を爭ふに及んでは、又盛んならずとせず。この間、固より一面に惡趣味を流布

（一）七五の調で、普通は八句を連れた歌。
（二）鎌倉時代に行はれた一種の謠物。
（三）足利時代の中期以後、德川時代の半頃まで行はれた舞曲で、扇拍子に大小の鼓を用ひたが、その舞に伴なふ詞章を「舞の詞」又は「舞の本」といつて、今に傳はるもの三十餘番ある。
（四）足利時代の中期以後行はれた舞曲の一種。
（五）元祿時代からこの名稱が見える。三味線に合せて唄ふ稍長い唄で、又箏唄としても用ひられた。

し、天眞の鑑賞力を蔽ふことなしと言はず。さもあれ、一般社會が如何に低度なりとも、吟哦諷誦のことを解するに至りしものは、皆短詩形流行の結果ならずばあらず。

更に顧みれば、平安朝の末期には稍長き今（一）樣ありき。吉野朝には宴（二）曲ありき。降つては幸（三）若あり、曲（四）舞歌あり。更に降つては長（五）唄あり、或は元祿の復古期には萬葉調の長歌も多く作り出されたり。されど、此等は皆專門家の作る所なりき。作るものの娛樂としてよりは、寧ろ他人をして讀ませ謠はせんが爲に作られたり。その平易なるもの、佳調なるものは、又頗る社會に傳誦せられて、國民の趣味に影響するところ多からざりしにはあらざれども、そは所謂餘業なる文藝、換言すれば、讀者たる人の文藝にはあらずして、文學者その人の文藝なりき。

（六）指貫を足でぬぐ夜や朧月　（與謝蕪村）
（七）古池や蛙飛びこむ水の音　（松尾芭蕉）
（八）「源氏物語」の主人公の名。
（九）「枕草子」に見えて居る人の名。

そもそも短き形式の間に稍複雜なる感情を寓せんとせば、必ず暗示の力に假らざるべからず。暗示とは、例へば「指貫」といひて優に麗しき大宮人を想見せしめ、「古池」とのみいひて閑寂なる境を想像せしむるの類なり。指貫を著たる者豈に必ずしも光君ならんや。「人に笑はるるものかな」と嗤はれし方弘の衣のみ美しきもなからじやは。されど、短き形式は、多くの場合に、かく特別なる性質を謠ふ能はざらしむ。そは許多なる修飾語を冠すべき餘地なければなり。この故に、短詩は多く類型を謠ふ。指貫の常に優美なるのみならず、春の月は必ず朧に、秋の月は常に清く、春の夕べの長閑ならぬはなく、秋の夕べの寂しからぬは稀なり。これ既に詩想の上の大なる拘束ならずや。加之、一事物より來る人人の印象は、その境遇・性質等により、固より同一なることを豫想すべからず。されば、古池に對して閑

寂の美を愛する者のみ、「蛙飛びこむ水の音」に更に一段甚深の興味あらん。古池の溷濁汚穢を聯想するものは、蛙の水音に對しては何の美感をも惹起せざるべきなり。古の名歌名句と稱せらるるものにして、往往その解釋に異説を生じ、或は常人に偉大の感興を與へざるものは、その境遇の異同に因することを多しとす。されば、若し此等の障礙を排して、よく一般の讀者に同情せしめんと欲せば、勢ひ最も普通なる事物の中に就て、最も相近き聯想を惹き得べき現象のみを採つて、詩材となさざるべからず。古の和歌が動もすれば花月の天地に限られ、後の發句も亦遠くこの樊籠を脱し得ざりしものは、實に歌人的思想、或は俳諧的事物にあらざるよりは、容易に理解同情せらるべき作物を成す能はざりしもの、これが主たる原因にはあらずや。

上古純朴の世、四民はその境遇に於て後世の如き甚しき異同なきのみならず、その詩歌の同情を求むるところも亦狹隘なる隣人の外に出でず。封建の世に及んでは、士農工商各〻その樊籠の裏に在つて、互にその吟哦を上下するのみ、敢て出でて一般の社會にその繡腸を誇示せんとするにはあらず。如上の缺點ある短き詩歌の、然く流行の勢を得たるものの一はこれが爲ならずや。かの俳人・歌人を以て職となすものと雖も、亦同好の間に於てす。歌人は俳人に示さんとせず、俳人も亦歌人に示さんとせず。俳句は俳人の文學にして、和歌は歌人の文學なるのみ。かるが故に、歌詞・俳語彌〻多くして、彼等は殊に不便を感ぜざりしなり。

純朴は複雜となりぬ。封建は破壞しぬ。我等は固より四民共通の文學を求めざるべからず。これ文學者たる者の任務なればなり。こ

本文は編者佐佐政一の作「醒雪遺稿」中に收めてある。

こになほ短歌・俳句を以て生命となして、自ら文士を以て居らんは、固より現代文士のことにあらざるべし。さあれ、天下盡く文士たるべき要なし。我等はなほ清き娯樂として、春宵一刻、歌を思ひ句を練らんことの最も適當なるを思ふ。予嘗て謂へらく、「弓箭刀槍は古の武器なりき。然り而して、古の武器は必ずしも今の武器にあらず。ただ適當なる遊戯として弓箭刀槍の存在を許さんのみ。」と。若し勇しき古の武藝が今なほよく尚武の氣風を養ふとせば、文字の遊戯は又多少の文學的趣味を啓發すべきなり。殊に武藝が大いに體力を養ふ如く、短詩の遊戯は多少の筆力を與ふべし。されば、今日に於ては、一般人士に對して、予はただ有益なる遊戯として短き詩歌の價値を認めんとするものなり。

零餘子 俳人。本名は長谷川諧三。群馬縣の人。東京帝國大學醫學部出身。昭和三年歿、年四十三。

亞浪 俳人。本名は臼田卯一郎。法政大學出身。

鬼城 俳人。本名は村上莊太郎。

井泉水 俳人。本名は荻原藤吉。東京帝國大學文學部出身。

繞石 英文學者。本名は大谷正信。東京帝國大學文學部出身。現に廣島高等學校教授。

七　春夏秋冬

○

松飾る家見えて著く夜船かな　零餘子

*

鵯のそれきり鳴かず雪の暮　亞浪

*

陽炎や澤邊につなぐはだか馬　鬼城

*

そよぎかはして若葉が喜べる程の風　井泉水

*

一山にひびく魚板や秋ゆふべ　繞石

溫亭　俳人。本名は篠原英喜。熊本縣の人。大正十五年歿、年五十五。

瓊音　文學者。本名は沼波武夫。愛知縣の人。東京帝國大學文學部出身。第一高等學校教授・日本女子大學教授。昭和二年歿、年五十一。

虛子　俳人。本名は高濱清。

碧梧桐　俳人。本名は河東秉五郎。

小波　文學者。本名は巖谷季雄。

漱石　文學者。本名夏目金之助。東京の人。大正五年歿、年五十。

梅室　俳人。本名は櫻井宣弘。加賀の人。嘉永五年（一五三）歿、年八十四。

蕪村　俳人・畫家。本名は谷口寅。攝津の人。天明三年（一四四三）歿、年六十七。

太祇　俳人。炭氏。江戸の人。明和八年（一四三一）歿、年六十三。

支考　俳人。各務氏。美濃の人。享保十六年（一三九一）歿、年六十八。

水鳥の胸つきあうて浮びけり　溫亭

＊

西瓜太郎踊り出でよと割つてけり　瓊音

＊

一つ根に離れ浮く葉や春の水　虛子

＊

石垣に鴨吹きよする嵐かな　碧梧桐

＊

大雪の海に消え入る靜けさよ　小波

＊

荒瀧や滿山の若葉みな震ふ　漱石

○

名月や草木に踊る人のかげ　梅室

＊

蕭條として石に日の入る枯野かな　蕪村

＊

山路來て向ふ城下や凧の數　太祇

＊

牛叱る聲に鳴立つ夕べかな　支考

＊

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春　其角

＊

この道や行く人なしに秋の暮　芭蕉

其角　俳人。本名は竹下源助。江戸の人。寶永四年（一七〇七）歿、年四十七。

芭蕉　次章參照。

宗因　本卷三九頁既出。

季吟　國學者。北村氏。京都の人。寶永二年歿、年八十二。

貞室　俳人。本名は安原正章。京都の人。貞德の門下。寛文十三年（一六七三）歿、年六十四。

貞德・守武・宗鑑　何れも本卷三八頁既出。

△世の中や蝶蝶とまれかくもあれ　宗因

＊

女郎花たとへばあはの内侍かな　季吟

＊

△松かげや月は三五夜中納言　貞室

＊

冬ごもり蟲けらまでもあなかしこ　貞德

＊

落花枝にかへると見れば胡蝶かな　守武

＊

手をついて歌申し上ぐる蛙かな　宗鑑

試書取

（一）滋賀縣滋賀郡石山村大字石山。そこに有名な石山寺がある。
（二）同村大字内畑にある岩間山正法寺。
（三）同村大字國分にある。
（四）膳所藩士。俗稱を本多八郎左衞門といひ、探山居士といつた人であるといふ。
（五）芭蕉の門人。

八　俳文三篇

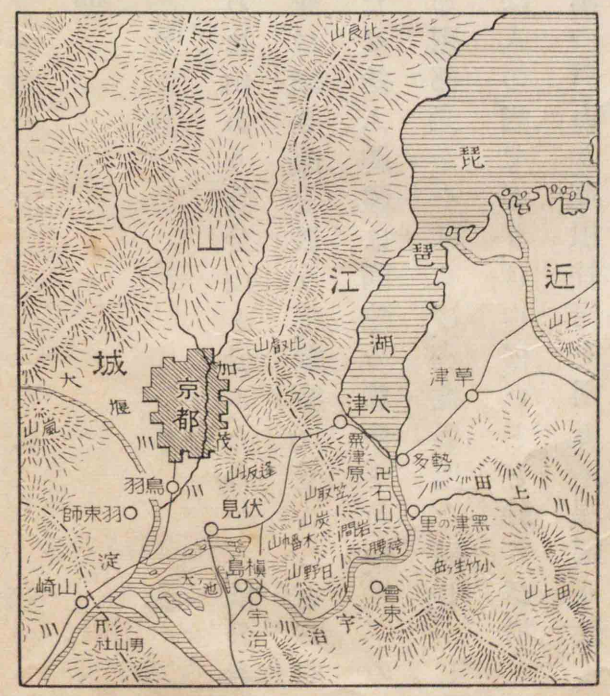
一、幻住庵の記

石山（一）の奥、岩間（二）のうしろに山あり、國分（三）山と云ふ。そのかみ、國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとど神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒を圍み、屋根漏り、壁落ちて、狐狸臥處（ふしど）を得たり。幻住庵と云ふ。あるじの僧（四）何某は、勇士菅沼氏、曲（五）翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予また市中を去ること十年ばかりに

して、五十年やや近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽・象潟の暑き日に面を焦がし、高すなご歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今歳湖水の波に漂ふ。鴉の浮巣の流れとどまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いと假初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

（一）吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ（西行法師）

さすが春の名残も遠からず、躑躅さき殘り、山藤松にかかつて、時鳥し



ばしば過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥のつつくとも厭はじなど、そぞろに興じて、魂は吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき程に隔たり、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るる舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物としして足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯のおもかげに通ひて、武藏野の古きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。さほが嶽千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて網代守るとてと詠みけむ歌の姿なりけり。

（二）滋賀縣滋賀郡にある名所。
（三）京都府宇治郡にある村の名。
（四）滋賀縣野洲郡にある山。
（五）同栗太郡にある山。
（六）同栗太郡に屬する地名。
（七）同滋賀郡にある山。
（八）同栗太郡に屬する地名。
（九）田上や黒津の庄のれこをとこ網代守るとて色の黒さよ（古歌）
（一〇）（一一）徐老海棠集上、王翁主薄峯庵。（山谷集）

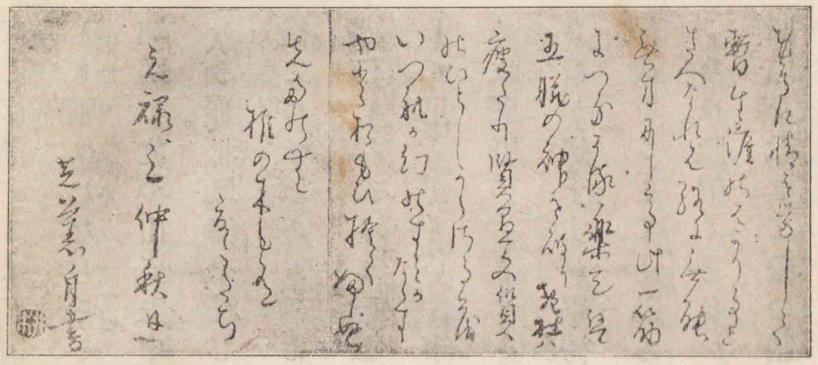
なほ眺望くまなからむと、後の峯に這ひのぼり、松の棚作り、藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巣をいとなび、主薄峯

（一）ッテ　ッシ　押し虱を青山に挾み書眠る北窗。（王荆公）

（二）とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすひまもなき住居かな（傳、西行法師）

（三）福岡縣三井郡にある山の名。但しその山上に高良明神あり、昔は神宮寺も一緒にあつた。

（四）藤木甲斐守敦直。



松尾芭蕉筆蹟（幻住庵の記の一節）

に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。ただ睡癖山民となつて、屠顔に足をなげいだし、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫をわびて、一爐のそなへいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いささかしつらへり。さるを、筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵のかたみとなしぬ。すべて、山居といひ、旅寢といひ、さるうつは蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。

晝はまれまれ訪らふ人人に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらぬ農談。日既に山の端にかかれば、夜座しづかに、月を待ちては影を伴なひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隱さむとにはあらず。やや病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。

つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、一度は仕官懸命の地を羨み、ある時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、暫く生涯のはかりごととさへ

（四）嘗て江戸の深川に住んでゐた頃、佛頂禪師に參禪したことをいふ。

なれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質の等しからざるも、何れか幻のすみかならずやと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

二、最上川

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。碁點・隼などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。これに稲積みたるをや稲舟といふならし。白絲の瀧は青葉のひまひまに落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲つて船あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

三、銀河序

（一）詩役二五臟神一。（白樂天）
（二）知君苦思緣レ詩瘦。（杜甫）
（三）山形縣北村山郡楯岡町の西方に方つて、最上川の中に許多の岩石が突出てゐる處。
（四）同郡大高根村富並の南方に方り、水勢の極めて急な淺瀨の部分。
（五）同縣最上郡古口村の西方にある山。
（六）同縣飽海郡酒田町。
（七）最上川のぼれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり（「古今集」東歌）
（八）古口村の北方に、川を隔ててある。
（九）古口村の近くにある堂の名。
（一〇）新潟縣三島郡にある町。

松尾芭蕉 俳人。名は宗房。伊賀の人。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

北陸道に行脚して、越後の國出雲崎（一〇）といふ處に泊る。かの佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて東西三十五里によこほりふしたり。峯の嶮難、谷のくまぐまでさすがに手にとるばかりあざやかに見渡さる。むべこの島は黄金多く出で、昔く世の寶となれば、限なきめでたき島にて侍るを大罪朝敵のたぐひ遠流せらるるにより、ただ恐しき名の聞えあるも本意なき事に思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで月ほのぐらく、銀河半天にかかりて星きらきらと冴えたるに、沖のかたより波の音しばしばはこびて、魂削るが如く、腸ちぎれてそぞろに悲しび來たれば、草の枕も定まらず、墨の袂何ゆゑとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふ天の川

（松尾芭蕉）

九　月は世世の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、このほどの老の寢ざめも覺束なし。いざ尋ね問はむ。」とて、ある夕暮に、例の人人うちつれて來しが、「またも參らむ。」とて歸らむとせしを、翁とどめて、「今宵は月もよし、薄酒すすめまつらむ。しひてとまり給へ。」といへば、「翁の心をいかでそむくべき。さあらば。」とて、おのおの座をしめて、清談の露やうやう繁きほどに、家人やがて心得て、とりあへぬまでにあるじまうけし、肴とりそへて盃出しけり。諸客皆醉ひて、興に入るとぞ見えし。

その中に、一人盃をとどめて、「青天有月來幾時。我今停盃一問之。」と

（一）李白が「把酒問月」の詩。

李白が詩を高らかにうち吟じけるを、又二人脇よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」と歌ふ。また外の人人迭に唱和して、その次を、「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。」と歌ふ。またその次を、「但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兎搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰隣。」と歌ふ。その次よりは翁も助音して、「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」と歌ひをさめけり。そののち數獻に及びて、玉山頽るるばかりに見えけり。

さて、翁いふやう、「大かたは月をもめでじとはよみたれども、老の心も月見るにぞなぐさみ侍る。されどそれにつきて千載無窮の感も起りぬれば、むべ月を人の老となるともいふべかめり。但し月を見るにいろいろあり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜

（二）唐の詩人。字は太白、號は青蓮。

（三）（四）大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの（「古今集」在原業平）

の宴に獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、『月は徑幾尺かあるべき。各〻考へて見たまへ。』といふ。また同じやうの人、かたへより、『あれは物の切口と見ゆ。奥へ長さ如何ほどかあらむ。』とて、たがひに僉議しけるを、聞く人人皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今おもへば、世俗月を賞して、光の明きをほこり、影の清きにめでて、良夜とてただ打寄り、物喰ひ酒呑みなどして唄ひののしるを樂しみとするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。また騷人・墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それもただ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、わがともがら古人を慕ひて、その書をよみ、その心を知りつつ、常に世を經たる恨あるに、月ばかりこそ世世の人を

照らし來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を偲びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。

今、李白が詩、月の景氣を捨てて、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事柄にあらず。昔より李・杜とて杜甫(一)が上に稱するもことわりにてこそ侍れ。然れども、李白が詩も古今流水の如きを感ずるまでにて、後代を待つの心は見えず。翁むかし楚(三)辭をよみて、『往者余弗及。來者吾不聞。』といふに至りて、屈(二)子が心をおしはかりつつ、感に堪へずなむおぼえし。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あは

(一) 唐の詩人。字は子美、號は少陵。
(二) 屈原の辭賦とその門人及び後人の作を輯めたもの。この句はその「遠遊篇」に見える。
(三) 楚の屈原。

れ一度逢うて語らうてと思へど、その世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめと思へど、その人を聞かねば、誰とか知らむとなり。これは屈子に限らず、古今心あるきはは、大かたこの恨なきにしもあらず。翁もこの心にして月を見るにや、いとど感深く覺ゆるなり。もとより今は末の代の昔なれば、いづれの代にか又わがごとく月に對して今を偲ぶ人もやあらむ。月はさこそその世をも照らすらめ。若しあつらへ告げらるるものならば、月にさは一言をも殘さましと思ひ侍る。そのこころを、

月見れば末の代までもしのばれて見ぬいにしへのいとどゆかしき

ここをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを諸君考へ見たまへ。いはれなきにはあらず。」（室鳩巣著「駿臺雜話」）

室鳩巣　徳川幕府の儒官で朱子學の大家。名は直清。享保十九年（一七三四）歿、年七十七。

一〇　玉かつま

一、新なる說を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、おほかたよろづのとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とりどりに新なる說を出す人多く、その說よろしければ世にもてはやさるるによりて、なべての學者未だよくもととのはぬ程より、われ劣らじと、よに異なるめづらしき說を出して、人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には隨分によろしきことも稀には出でくめれど、おほかた未だしき學者の心はやりて言ひいづる事はただ人にまさらむ勝たむの心にて、かろがろしく前しりへをもよくも考へ合さず、思ひよれるままに打ちいづる故に、多くはなかなかなるいみじき僻事のみなり。總て

新なる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よく確なるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、程へて後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、われながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

二、足ることを知る

高きみじかきほどに望みねがふ事の盡きせぬぞ、世の人のまごころにて、今は足りぬとおぼゆる世はなきものなるを、世には足ること知れるさまにいひて、さるかほする人の多かるは、からやうの作りごとにこそあれ。まことに清くしか思ひとれる人は、千萬の中にもありがたかるべきわざにこそ。

三、世の物知り人

世の物知り人の、ひとのときごとのあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人は如何にそしるとも、わが思ふすぢをまげて從ふべき事にはあらず。人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ。大方、一むきにかたよりてあだしときごとをばわろしとがむるをば心せばく善からぬ事とし、一むきにはかたよらずあだしときごとをもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、必ずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定まりてそを深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それにた

がへるすぢをばとるべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。さるを、これもよし、又かれもあしからずといふはよる所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、そを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしき事をばおのづから咎めざる事あたはず。これ信ずる所を信ずるまめごころなり。人は如何に思ふらむ、われは一むきにかたよりてあだしときごとをばわろしと咎むるも、必ずわろしとは思はずなむ。

四、近き世の人の歌文

近き世の人のは、歌も文も、大方はよろしと見ゆるにも、なほひがごと多きぞかし。されどそのたがへるふしを見知れる人はた世になければ、ただかいなでにここかしこえんなる言葉をつかひ、よしめきて詠みなし、書きちらしたるをば、誠によしと見て人のもてはやし譽めたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞ思はるる。

又近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまることは程程にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆるところまじりて、大方瑕なくととのひたるはをさをさ見えず。これを思へば、後の世にして古をまねぶことは、いといと難きわざになむありける。古の賢き人人のだにこれはしもつゆの瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも少なくなむあれば、まして今の人のは、いさかなる瑕をさへに言ひたてむは、あながちなるにやあらむ。されど同じくは、人のいささかも難ずべきふしまぜぬさまにこそはあらまほしけれ。（本居宣長著「玉かつま」による）

本居宣長　國學者。伊勢の人。賀茂眞淵の門下。享和元年(一八〇一)歿、年七十二。

（一）文治二年。（一八六）
（二）右大將源頼朝。

二　月の前

（一）文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大（二）將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人人、御前追ひ、御後べ仕うまつれり。渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遲からず、列を亂さず練出でさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛（けい）して「あな」とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有樣なり。

かへりまをしして、御手輿に召させ給ふほど、さとき御まなじりに見とどめさせ給ひ、御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと痩せ黑みたるに、衣杖笠なども乞食者（ものもらひ）の樣したるが、目を偸みてうづくまり居る、直人（かたびと）ならず思しけむ、「あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿

（二）西伯將二出獵一ントスルトシテ卜之。曰、所レ獵非レ龍、非レ彲、非レ虎、非レ羆。所レ獵霸王之輔。於レ是西伯獵、遇二太公於渭之陽一。（「史記」）

（四）八百日ゆく濱の眞砂を數きかへて玉になしつる秋の夜の月（「千載集」藤原長方）

ぞひの若侍、急ぎ走り寄りて、「あり難く御目給へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、「雲水に在處定めず侍る者にて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、「されば（三）こそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで賢き人得たる例に誘ひ歸らむ。わが後につきて來れ。」とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ給ひ、御裝束改めさせ給へば、やがて大となぶら數多照らし挑げたり。「今日の道ゆきづと奉てこ。」と仰せ給ふ。「法師まゐれ。」とて御座近き所の一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射（はこや）の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑く窶したれど、月花の響は物の心なき東人（あづまびと）さへ聞知りたるぞ。文字の數だに歌とのみ思ひしもかう指向ひては、武士の負けじ心もあらずなりぬるぞ。（四）八百日ゆく濱の眞砂の中に

は、玉とて拾ひ收めたらむを、語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。いみじく畏まりて、「思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いとも輝かしきにぞ、ただ夢路辿るやうに侍りて、聞え奉るべき事も侍らずさとき御眼に見現されて侍ることそいとも有り難けれ。伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れど、效あることも打出で侍らぬには、これとくもあらず。君にも豫て學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器物の大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍る。大空に羽うちて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。」と申す。

（一）伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今は何てふかひかあるべき（「後撰集」藤原敦忠）

守口如瓶
みゝなしの山の
口なし染て著む
聞かれは何を人
に告めや
餘齋

上田秋成筆蹟

捧げて奉るべ

打笑ませ給ひ、「弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直くあからさまにと聞くは眞か。歌は武士の荒荒しき心には詠み得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十餘の學びには心の後るるは如何に。」「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代代の帝は、馬に鞍おき、弓矢取らして、軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直直しく、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、益荒男心を取隱し、あてになよびかにのみ詠出でまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のままに詠ませ給はむには、今の世の人、誰かは並びあへ奉らむ。三尺の劍を取りて（二）大風起り雲飛揚すと歌ひ、槊を横たへて烏鵲南にと詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみが

（二）大風起兮雲飛揚、威加二海内一兮歸二故郷一、安得二猛士一兮守二四方一。（漢高祖）

（三）烏鵲南飛。遶レ樹三匝、何枝可レ依。山不レ厭レ高、海不レ厭レ深。周公吐レ哺、天下歸レ心。（曹操）

きたるも、染殿の八入の色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど、谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、何れの道、何の業にも、始より優れたらむは鬼にこそ侍らめ。」といふ。

「人人、あれ聞き給へ。世は捨て遁れても、頼もしき人の心ならずや。圓位よ、汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらむ。事一言にても教へ承らばや。」「こは益く恐ある御問はせなり。御物語の果て果ては、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の痩法師にだに問はせ給ふ事の忝なさよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳はりなどとて聞えや奉るべき。まして有り難き大宮仕を否み奉り、親達の慈しみをさへあだなるものに思ひなして、年僅に二十三にして家を出でたる徒者の、弦

ひかむ術一つだに心に留めし事も侍らず。唯一言の忘れ難きは、賞を重くし罰を輕くせよと言ひしと、任ずる者を辱しむれば危しと言ひし事とのみ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減らして人を危きに陷るるは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを、餘處ながら聞き奉るには、この方の御問はせ免させ給へ。」とて、額を板敷にすりつけて申す。君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してむ。人人と土器取りはやし、曉かけて遊ばむ。客人は酒飲まざるべし。鹿猿の中に立交りて、歌詠めといふとも詠むまじ。唯わが前にて遊べ。風冷やかなるにも、飽かず飲み、物きたなげに食散らす人人は暖かにもこそ。この火取り法師に參

(一) 卒有病疽者、起爲吮之。（「史記」吳起傳）

(二) 孫臏使齊軍入魏地、造十萬竈。明日爲五萬竈。又明日爲三萬竈。龐涓行三日、大喜曰、我固知齊軍怯。入吾地三日、士卒亡者過半矣。乃棄其步軍、與其輕銳、倍日并行逐之。孫子度其行、暮當至馬陵。馬陵道狹、而旁多阻隘、可伏兵。乃斫大樹、白而書之曰、龐涓死此樹之下。「史記」孫子傳）

らせよ。」とて、白銀もて作りたる猫の形したるを取傳へて、「君より賜はす。」とて前に置きたり。「鹿猿は猶心猛し。鼠をだにえ捕らぬ痩法師がためには、似つかはしき御賜物ぞ。」とて、三度押戴きぬ。翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人宿りに、誰殿の童ならむ、括袴の裾朝露に濡れそぼちていと寒げに居るを見て、「これ取らせむ。火埋みて、手足暖めよ。」とて、かのきらきらしき物を與へて、顧みもせず立ちぬ。

童打驚き、「これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬ物を賜ひつるは。」とて、青侍に見すれば、目口をはたけ、「かく尊き寶物を誰かは得させむ。盗みやしつる。」といふ。「更に更に、道の空に斯かる物やはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼出で、しかじかの事なむと申す。「いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、爭で童には得させけむ。訝し。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君

打笑み給ひ、「かの似而非法師、あなづらはしく、幼げなる物くれしとて、腹立たしくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とても男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど、家を出でて猶身を守り、才に誇りて、野山に混り、歌詠みてのみあるは、捨人の棄てらるべき淺ましさぞかし。一度穢れし物、その童に取らせよ。」とて取りおろさせ給ひぬ。西行、後にこの事を人に語りていふ。「右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふ事を生れ得させけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔の、この後漸う衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙留め難くして物語りしとなり。*心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、打顰みぬべし。（上田秋成著「藤簍冊子」による）

*心なき身にもあはれは知られけり鴫立の澤の秋の夕暮（西行法師）

上田秋成　國學者・小説家。大阪の人。文化七年（一八一〇）歿、年七十八。

一二　東下り

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様様に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又この度の白状どもに、専ら隠謀の企かの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて、関東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも赦されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て帰る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寝となれば物うきに、恩愛の契浅からぬ、わが故里の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、

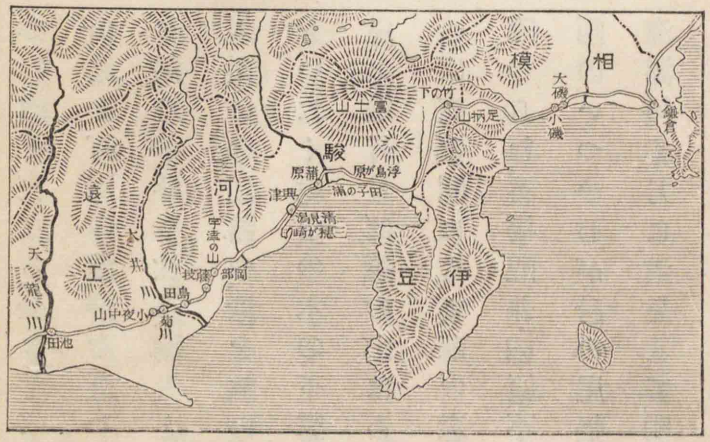
（一）藤原氏。後醍醐天皇に仕へ、元弘元年興復の密謀に参し、一度は辯疏して赦されたが、密告によって再び捕へられ、元弘二年（一九二二）鎌倉で殺された。
（二）俊基等の密謀に加盟し、露顯して攻められ、戰つて自殺した。
（三）元弘元年五月、謀に加はつた三名の僧侶が捕へられて鎌倉で事實を白狀した。
（四）またや見む交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙（「新古今集」藤原俊成）
（五）朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき（「拾遺集」藤原公任）

心の内ぞ哀なる。憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もとどろと踏鳴らす、瀬田の長橋打渡り、行交ふ人に近江路や、世を畝の野になく鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠わくる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、故里を雲や隔つらむ。番場・醒井・柏原、不破の關屋は荒れはてて、猶もる物は秋の雨の、いつかわが身の尾張なる、熱田の八劔ふし拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

（六）逢坂の關の清水に影見えて今やひくらむ望月の駒（「拾遺集」紀貫之）
（七）近江より朝たちくればうれの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は（「古今集」近江ぶり）
（八）白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり（「古今集」紀貫之）
（九）道のべの草の青葉に駒とめて猶ふるさとをかへりみるかな（「新古今集」藤原成範）
（一〇）さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に汐やみつらむ（「新古今集」藤原秀能）

旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり」と詠じつつ、再び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。

隙ゆく駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉參らする程とて、輿を庭前に昇止む。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし科によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、



（一）年だけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（「山家集」）

（二）承久三年。（一八一）

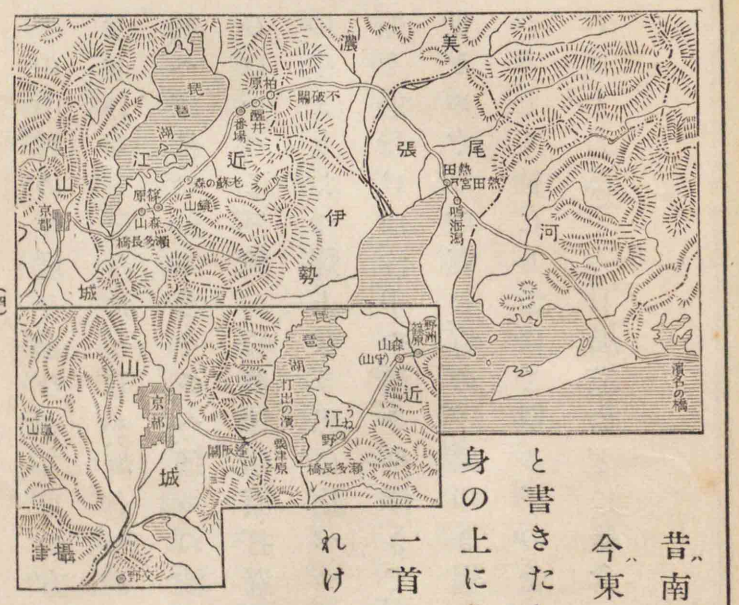
（三）宗行卿の誤。

昔、南陽縣、菊水、汲下流而延齢。今、東海道、菊河、宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとど增りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかかるためしを菊川の同じ流に身をや沈めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿（四）の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと



（四）今の京都市右京區に屬する嵯峨にあつた。後、寺となつて、天龍寺といふ。

思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかかりて、岡部の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、向ひはいづこ三穗が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中よりたつ煙、上なき思に比べつつ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下路ゆき惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

（著者未詳「太平記」による）

（一）「伊勢物語」の主人公、或はその著者だと言はれる人。
（二）駿河なるうつの山べの現にも夢にも人にあはぬなりけり（「伊勢物語」）
（三）富士の嶺の煙はなほも立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（「新古今集」藤原家隆）
（四）元弘元年。（一九一）

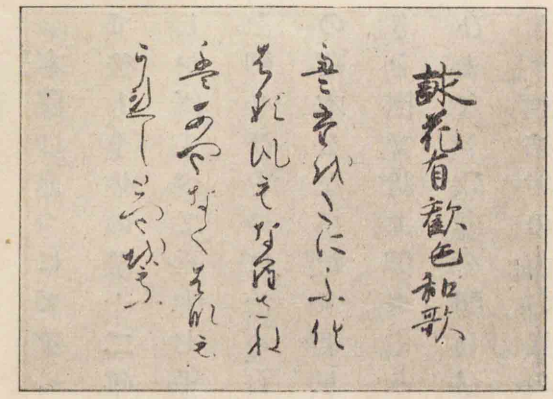
一三　新島守

本院は六つにて位に即き給ひて、十四年おはしましき。おり給ひて後も、土佐の院十二年、佐渡の院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十七年がほど、この國のあるじとして萬機の政事を御心ひとつに治め、百のつかさを從へ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御有樣にて、遠きをあはれみ近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政事を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやうやう枝を連ねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一

（五）後鳥羽上皇。
（六）土御門上皇。
（七）順德上皇。
（八）津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重ぶき（「續後拾遺集」和泉式部）

ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからことぶものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、わが故里のしるべかとばかり、ながめ過ぐさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心ぼそかるべし。まいて、何時をはてとかめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の波、煙の波の、幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御樣ども、くち惜しともおろかなり。

詠花有歡色和歌
えたなたにふくはる風もならさねはあやなくはなもうれしとやなもふ



後鳥羽天皇御宸筆

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに、柴(一)の庵のただしばしと、かりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、故づきてしなさせ給へり。水(二)無瀨殿おぼし出づるも夢のやうになむ。遙遙と見やらるる海の眺望、二(三)千里の外も殘りなき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞し召して、

◎われこそは新島守よおきの海のあらき波風こころして吹け

◎同じ世にまたすみのえの月や見む今日こそよそにおきの島もり

年(四)もかへりぬ。處處、浦浦、あはれなる事をのみおぼし歎く。佐渡の

(一)いづくにも住まれずばただ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に（西行）
(二)後鳥羽天皇が極めてこの地を愛して設けられた離宮で、それは今の大阪府三島郡島本村に屬する。
(三)三五夜中新月色、二千里外故人心。（白樂天）
(四)承久四年（一八二）になつたことを指していふ。

院、明けくれ御行をのみし給ひつつ、なほさりともとおぼさる。隱岐には、浦よりをちの、遙遙と霞み渡れる空を眺め入りて、過ぎにし方かきつくしおぼし出づるに、行くへなき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやましながき日影の春にあひて汐くむあまも袖やほすらむ

夏になりて、かやぶきの軒端に五月雨の雫いとところせきも、御覽じなれぬ御心地に樣かはりて珍しくおぼさる。

あやめ葺くかやが軒端に風過ぎてしどろに落つるむら雨の露

初秋風のたちて、世の中いとどものがなしく、露けさまさるに、いはむ方なくおぼしみだる。

ふるさとを別れ路に生ふる葛の葉の秋はくれどもかへる世もなし

たとしへなく眺めしをれさせ給へる夕暮に、沖の方に、いと小さき木の葉の浮べると見えて漕ぎくるを、海人の釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七*條院よりまゐれる御文、引きあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心地すれば、ややためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日經にけること。今日明日とも知らぬ命のうちに、今ひとたび、いかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなむ。」など、いと多くみだれ書き給へるを御顏におしあてて、

たちちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかで問はまし

*後鳥羽上皇の御母。

八百萬神もあはれめたらちねのわれ待ちえむと絶えぬ玉の緒

初雁のつばさにつけつつ、此處彼處よりあはれなる御消息のみ常に奉るを御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。(一)家隆の二位は「新古今」の撰者にも召しくはへられ、大かた歌の道につけて睦じく召仕へし人なれば、夜晝こひ聞ゆること限なし。卷きかさねて書きつらねまゐらせたる「和歌所の昔の俤、かずかず忘れがたう。」など申して、つらき命の今日まで侍ることの恨めしきよしなど、えもいはずあはれ多くて、

寢ざめして聞かぬを聞きてわびしきは荒磯なみのあかつきの聲

とあるを、法皇もいみじとおぼして、御袖いたくしぼらせ給ふ。

(一)從二位藤原家隆。

波間なきおきの小島の濱びさしひさしくなりぬみやこ隔てて

木がらしのおきの杣山吹きしをり荒くしをれてものおもふ頃

をりをり詠ませ給へる御歌どもを書きあつめて、(二)修明門院へ奉らせ給ふ。その中に、

水無瀨山わがふるさとは荒れぬらむまがきは野らと人も通はで

限あればさても堪へける身のうさよ民の藁屋に軒をならべて

かやうのたぐひ、すべて多く聞ゆれど、さのみは年の積りにえなむ。今また思ひ出でば、ついで求めてとて。(著者未詳「增鏡」による)

(二)藤原重子。後鳥羽天皇に侍した。順德天皇の御生母。

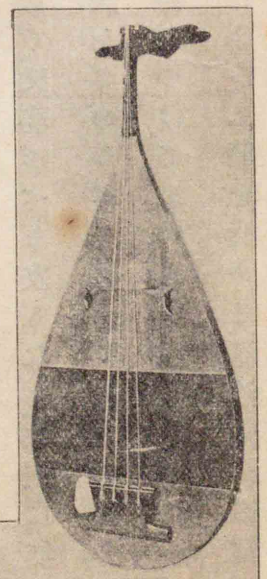
一四　方丈の記

ここに六十の露消え方に及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。言はば狩人の一夜の宿をつくり、老いたる鸞の繭をいとなむが如し。その家のありさま、世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず、土居を組み、うちおほひを葺きて、接目毎にかけがねをかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむがためなり。その改め造る時、幾ばくの煩ひかある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に用途いらず。

いま日野山(一)の奥に跡を隠して、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢、並に不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃、往生要集(二)ごときの抄物を入れたり。傍に、箏・琵琶、各〻一張をたつ。いはゆる折箏・繼琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、ここに文机を出せり。枕の方に炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占めあばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち諸〻の藥草

(一) 京都市伏見區にある地名。

(二) 平安朝時代の高僧源信（惠心僧都）の著。因に、源信は寛仁元年（一六七）寂、年七十六。



折箏と繼琵琶

を植ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

その處のさまを言はば、南に筧あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷茂けれど西は晴れたり、觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る、紫雲の如くして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く、語らふ毎に死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に充てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、

(一)この世にてかたらひおかむ時鳥死出の山路のしるべともなれ(「山家集」堀川局)

(二)世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく船のあとの白波(「拾遺集」沙彌滿誓)

(三)京都府宇治郡宇治村に屬する地名で宇治川に臨んでゐる。

(四)沙彌滿誓。元明・元正天皇の御代の人。

もし桂の風葉を鳴らす夕べには、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、屢松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。獨り調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

又麓に一つの柴の庵あり。卽ちこの山守が居る處なり。彼處に小童あり、時時來りて相とぶらふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歲、我は六十その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。あるは茅花を拔き、岩梨を探る。又零餘子を もり、芹をつむ。あるはすそわの田居に至りて、落穗を拾ひて穗組を作る。もし日うららかなれば、嶺に攀登りて遙かに故鄕の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。歩み煩ひなく、志遠く至る時は、これより峯つづき、炭山を

(五)支那の西江省にある。

潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟瑟。(白樂天)

(六)桂大納言源經信。桂流琵琶の元祖。

(七)堀河天皇の御代の人。

(八)ともに樂曲の名。

(九)京都府宇治郡。

(一〇)京都市伏見區。

(一一)京都府乙訓郡。

越え、笠取(一)を過ぎて、あるは岩間(二)に詣で、あるは石山(三)を拜む。もしは又粟津(四)の原を分けて蟬丸(五)の翁が跡を弔ひ、田上(六)川を渡りて猿丸(七)大夫が墓を尋ぬ。歸るさには、折につけつつ櫻を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひてかつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に故人を偲び、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇島(八)の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥(九)のほろほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴(一〇)れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。あるは埋火を搔起して老の寢覺の友とす。恐(一一)しき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や、深く思ひ深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住みめそし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五年を經たり。假の庵もやや古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都を聞けば、この山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるも數多聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度度の炎上に滅びたる家またいくそばくぞ。ただ假の庵のみのどけくして恐なし。程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る、卽ち人を恐るるが故なり。われ又かくの如し。身を知り世を知れれば、願はず交らず、ただ靜かなるを望とし、愁なきを樂しみとす。すべて、世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。あるは妻子・眷屬のために造り、或は親昵・朋友のために造る。あるは主君・師匠、および財寶・馬牛のためにさへこれを造る。われ今

（一）京都府宇治郡。
（二）（三）（四）滋賀縣滋賀郡。
（五）仁明天皇の御代の歌人。
（六）滋賀縣栗太郡。
（七）歌人。傳未詳。
（八）京都府久世郡。
（九）山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ（行基）
（一〇）山ふかみ馴るるかせぎのけぢかきに世に遠ざかる程ぞ知らるる（西行）
（一一）山深みけぢかき鳥の音はせで物おそろしき梟のこゑ（西行）

身のために結べり、人のために造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。

それ人の友たる者は富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。ただ絲竹・花月を友とせむには如かず。人の奴たる者は、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、安く靜かなるをば願はず。ただわが身を奴とするには如かず。若しなすべき事あれば、則ちおのづから身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ、人を顧みるよりは安し。もしありくべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍・牛車と心を惱ますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手の奴、足の乘物、よくわが心に適へり。心又身の苦しみを知れれば、苦しむ時は

（一）人之爲レ友者、以レ勢以レ利、不ニ以レ淡交一、不レ如レ無レ友。（慶滋保胤）

休めつ、まめなる時は使ふ。使ふとても度度すぐさず。ものうしとても心を動かす事なし。いかに況や、常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞ徒に休み居らむ。人を苦しめ人を惱ますはまた罪業なり。いかが他の力をかるべき。衣食の類また同じ。藤の衣、麻の衾、得るに隨ひて肌を隱し、野邊の茅花、峯の木の實、命を繋ぐばかりなり。人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうの事、樂しく富める人に對して言ふにはあらず。唯わが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

大かた世を遁れ身を捨てしより恨もなく、恐もなし。命は天運に任せて、惜しまず、厭はず。身をば浮雲になずらへて、頼まず、まだしとせず。一期の樂しびは轉寢の枕の上に極まり、生涯の望は折折の美

（二）是身如ニ浮雲一、須臾變滅。（「維摩經」）

（三）盧生が邯鄲の一炊の夢の故事によつて言つたのである。

景に残れり。それ三界は唯心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今寂しき住まひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれる事を恥づといへども、歸りて此處に居る時は、他の俗塵に著する事を憐ぶ。若し人この言へる事を疑はば、魚鳥の有樣を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。

抑〻一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇に向はむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人を敎へ給ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかが用なき樂しみを述べて、空しくあたら時を過さむ。（鴨長明著「方丈記」による）

(一) 三界唯一心、心外無二別法。（「華嚴經」）

(二) 七寶といふも同じい。金・銀・水精・瑠璃・琥珀・瑪瑙・硨磲。

(三) 子非魚、安知二魚之樂一。（「莊子」）

(四) 佛果を得ずして死んだものの行くべき三惡道、即ち、地獄・餓鬼・畜生の三界。

鴨長明　もと後鳥羽上皇の北面の武士。後に遁世して僧となる。歌文に達してゐた。健保四年（一八六）寂、年六十四。

一五　大原の奥（その一）

建禮門院は、東山の麓、吉田の邊なる處にぞ立入らせ給ひける。中納言の法印慶惠と申す奈良法師の坊なりけり。住荒らして年久しうなりければ、庭には草深く、軒にはしのぶ茂れり。簾斷え、閨あらはにて、雨風たまるべうもなし。花は色色匂へども、主と賴む人もなく、月は夜な夜なさし入れども、眺めて明かす主もなし。昔は玉の臺を磨き、錦の帳にまとはれて、明かし暮させ給ひしが、今はありとしある人にも皆別れはてて、淺ましげなる朽坊に入らせ給ひけむ御心の中、推量られてあはれなり。魚の陸に上れるが如く、鳥の巢を離れたるが如し。さるままには、憂かりし波の上、船の中の御住まひも、今は戀しうぞ思し召されける。蒼波路遠し、思を西海千里の雲に寄す。

(五) これは「平家物語」灌頂卷の「女院御出家の事」「小原への入御の事」の二條に亙る部分の節錄である。

(六) 高倉天皇の中宮。安德天皇の御母。平德子といひ、清盛の女。建保元年（一八三）薨、年五十七。

(七) 蒼波路遠雲千里、白鷺山深鳥一聲。（「和漢朗詠集」）

白屋苔深くして、涙東山一庭の月に落つ。悲しとも言ふばかりなし。

かくて女院は、(一)文治元年五月一日の日、御髪おろさせ給ひけり。御戒の師には長樂寺の阿證坊の上人印誓とぞ聞えし。

女院は十六にて后妃の位にそなはり、二十二にて皇子(三)御誕生あつて、やがて皇太子に立ち、(三)位に卽かせ給ひしかば、院號蒙らせ給ひて建禮門院とぞ申しける。入道相國の御女なる上、天下の國母にてましませば、世の重うし奉ること斜ならず。今年は二十九にぞならせましける。桃李の御裝なほこまやかに、芙蓉の御容も未だ衰へさせ給はねども、翡翠の御簪つけても何にかはせさせ給ふべきなれば、遂に御樣を變へさせ給ひてけり。憂き世を厭ひ、誠の道に入らせ給へども、御歎は更につきせず、人人今はかうとて海に沈みしありさま、(四)先帝・(五)二位殿の御面影ひしと御身に添ひて、如何ならむ世

(一)後鳥羽天皇の御代の年號。（一八四五―一八五〇）
〔參考〕この文治元年卽ち壽永四年三月二十四日平家は滅びた。
(二)言仁親王。治承二年（一八一八）十一月御誕生。
(三)安德天皇。治承四年四月御卽位。
(四)安德天皇。
(五)清盛の妻、建禮門院の母。

翡翠

に忘るべしとも思し召さねば、露の御命の、何しに今までながらへて、かかる憂き目を見るらむとて、御涙せきあへさせ給はず。

去んぬる七月九日の日の大なゐに、築地も崩れ、荒れたる御所も傾き破れて、いとど住ませ給ふべき御便りもなし。(七)緑衣の監使、宮門を守るだにもなし。心のままに荒れたる籬は茂き野邊よりも露けく、折知り顏に何時しか蟲の聲聲恨むるもあはれなり。さるままには、夜も漸う長くなれば、いとど御寐覺がちにて明かしかねさせ給ひけり。盡きせぬ御物思に、秋のあはれさへ打添ひて、いとど忍び難うぞ思し召されける。何事も皆變り果てぬる浮世なれば、自ら情をかけ奉るべき昔の草の緣も皆枯れはてて、誰育み奉るべしとも覺えず。されども、冷泉、大納言隆房、卿の北の方、七條、修理大夫信隆、卿の北の方より、忍びつつ常は言問ひ申されけり。女院、その昔、あの人ど

(七)六位の門衛。但しこれは白樂天の詩句による。
〔參考〕紅顏闇老白髮新、緑衣監使守二宮門一。（白樂天）
(八)傳未詳。
(九)清盛の第六女。

もの育みにてあるべしとは、露も思し召し寄らざりしものを。」とて、御涙を流させ給ひければ、附き參らせたる女房たちも、皆袖をぞ濡らされける。

この御住まひも、猶都近くて、玉鉾の道行き人の人目も繁ければ、露の御命の風を待たむ程、憂(一)き事聞かぬ深き山の奥へも入りなばやとは思し召されけれども、さるべき便りもましまさず。或女房の吉田に參つて申しけるは、「これより北、大原山の奥、寂(二)光院と申す處こそ靜かに候へ。」とぞ申しける。女院、山(三)里は物の寂しき事こそあんなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものをとて、思し召し立たせ給ひけり。御輿などをば、信隆隆房の北の方より御沙汰ありけりとかや。

文治元年九月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがら

(一)栞せでなほ山深く分入らむ憂きこと聞かぬ處ありやと　(西行法師)

(二)京都府愛宕郡大原村の西南にある。延暦寺の別所。

(三)山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり(「古今集」)

四方の梢の色色なるを御覽じ過ぎさせ給ふ程に、山陰なればにや、日も漸う暮れかかりぬ。野寺の鐘の入相の聲凄く、分くる草葉の露繁み、いとど御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉みだりがはし。空かき曇り、何時しか打時雨れつつ、鹿の音微かにおとづれて、蟲の恨もたえだえなり。とにかくに取集めたる御心細さ、譬へ遣るべき方もなし。浦傳ひ島傳ひせしかども、さすがかくはなかりしものをと、思し召すこそ悲しけれ。岩に苔蒸して寂びたる處なれば、住まほしくぞ思し召す。露結ぶ庭の荻原霜がれて、籬の菊のかれがれに、うつろふ色を御覽じても、御身の上とや思しけむ、佛の御前へ參らせ給ひて、「天子聖(四)靈、成等正覺。一門亡魂、頓證菩提。」と祈り申させ給ひけり。何時の世にも忘れ難きは先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならむ世にも忘るべしとも思し召さず。

(四)安德天皇の亡靈をさす。

さて寂光院の傍に方丈なる御庵室を結んで、一間をば佛處に定め、一間をば御寢處にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛、怠る事なくして月日を送らせ給ひけり。かくて神無月中の五日の暮方に、庭に散りしく楢の葉を、もの踏みならして聞えければ、女院、「世を厭ふ處に何者の訪ひ來るやらむ。あれ見よや、忍ぶべきものならば、急ぎ忍ばむ。」とて見せらるるに、小鹿の通るにてぞありける。女院「さていかにや、いかに。」と仰せければ、大納言佐局、涙を抑へて、

岩根ふみたれかは訪はむ楢の葉のそよぐは鹿の渡るなりけり

女院、この歌餘りにあはれに思し召して、窓の小障子に遊ばし留めさせおはします。かかる御つれづれの中にも思し召しなぞらふ事どもは、つらき中にも數多あり。軒にならべたる植木をば七重寶樹とかたどり、岩間につもる水をば八功德水と思し召す。無常は春の花、風に從つて散り易く、有涯は秋の月、雲に伴なつて隱れ易し。昭陽殿に花を弄びし朝には、風來つて匂を散らし、長秋宮に月を詠ぜし夕べには、雲おほつて光を隱す。昔は玉樓金殿に錦の褥を敷き、妙なりし御住まひなりしかども、今は柴ひき結ぶ草の庵、よその袂もしをれけり。

（一）平重衡の妻。
（二）七重に並列してゐるといふ極樂の寶樹。金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・碼瑙樹・硨磲樹。
（三）淨土にあるといふ八つの功德を有する池水。
（四）（五）共に宮殿の名。後宮をいふ。

一六　大原の奥（その二）

かかりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住まひ御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・三月の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららも打溶けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて

（六）この一章は同じく灌頂卷の「小原御幸」の條全部に「六道の沙汰の事」の最初の一部分を加へたものである。
（七）後白河法皇。
（八）加茂の祭。四月の中の酉の日に行はれた。

大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には、後德大寺(一)・花山院(二)・土御門(三)以下、公卿六人、殿上人八人、北面少少さむらひけり。鞍馬通の御幸なりければ、かの清原深養父(四)が補陀樂寺、小野(五)皇太后の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。

遠山にかかる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるる。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

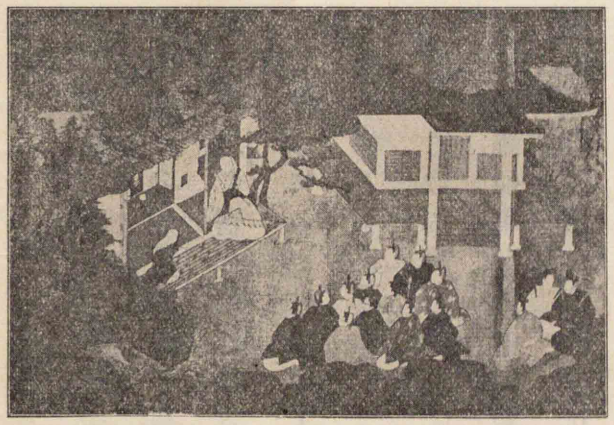
西の山の麓に一宇の御堂あり。卽ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立、よしあるさまの處なり。甍破れては霧不斷の香を焚き、扉(とぼそ)落ちては月常住の燈を挑ぐとはかやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇これを御覽あつて、かうぞ思し召し續けける。

池水にみぎはのさゞら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

舊りにける岩の絶間より、落ちくる水の音さへ、故び、よしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に描くとも筆も及び難し。さて、女院の御庵室を御覽あれば、軒には蔦・蕣はひ懸り、しのぶまじりの忘草、「瓢簞(六)屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」とも言ひつべし。杉の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、溜るべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いささ小笹

(一)左大臣藤原實定。
(二)大納言藤原兼雅。
(三)權中納言源通親。
(四)歌人。延喜・延長頃の人。
(五)後冷泉天皇の皇后藤原歡子。
(六)「和漢朗詠集」に見える橘直幹の句。

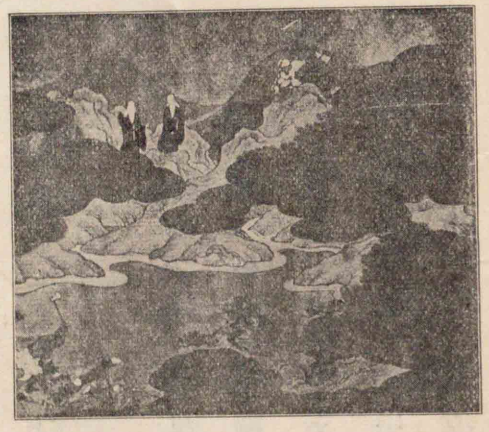
に風騷ぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、僅に言問ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つづら、くる人稀なる處なり。



大原御幸繪卷

法皇、「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。ややあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この山の上へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒(一)・十善(二)の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かかる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。

(一)不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒。
(二)十惡をせぬこと。十惡とは、殺生・偸盗・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見。



(寂光院所藏)

この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有樣にてもかやうのこと申す不思議さよと思し召して、「抑、汝は如何なるものぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、暫しは御返事にも及ばず。ややあつて、涙を抑へて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言(三)入道信西(四)が女、阿波、內侍と申すものにて候なり。母は紀伊(四)、二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひ

(三)藤原通憲。
(四)信西の妻朝子。

しに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、「げにも汝は阿波、內侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、ただ夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりに申しけりとぞ各〻感じ合はれける。

さて、かなたこなたを御覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつつ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて、女院の御庵室に入らせおはしまし、障子を引明けて御覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尙並に先帝の御影を懸け、八軸の妙文、

（一）彌陀・觀音・勢至。
（二）唐の名僧。

九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂に引替へて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を御覽あるに、御寢處とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸けられたり。さしも本朝・漢土に妙なる類、數をつくし綾羅・錦繡の裝も、さながら夢とぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

ややあつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつつ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、「あれは如何なるものぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐（はながたみ）臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に蕨折りそへて持ちたるは、鳥飼、中納言維實が女、先帝の御乳母、大納言佐局。」と申しも敢へず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人

も、皆袖をぞ濡らされける。

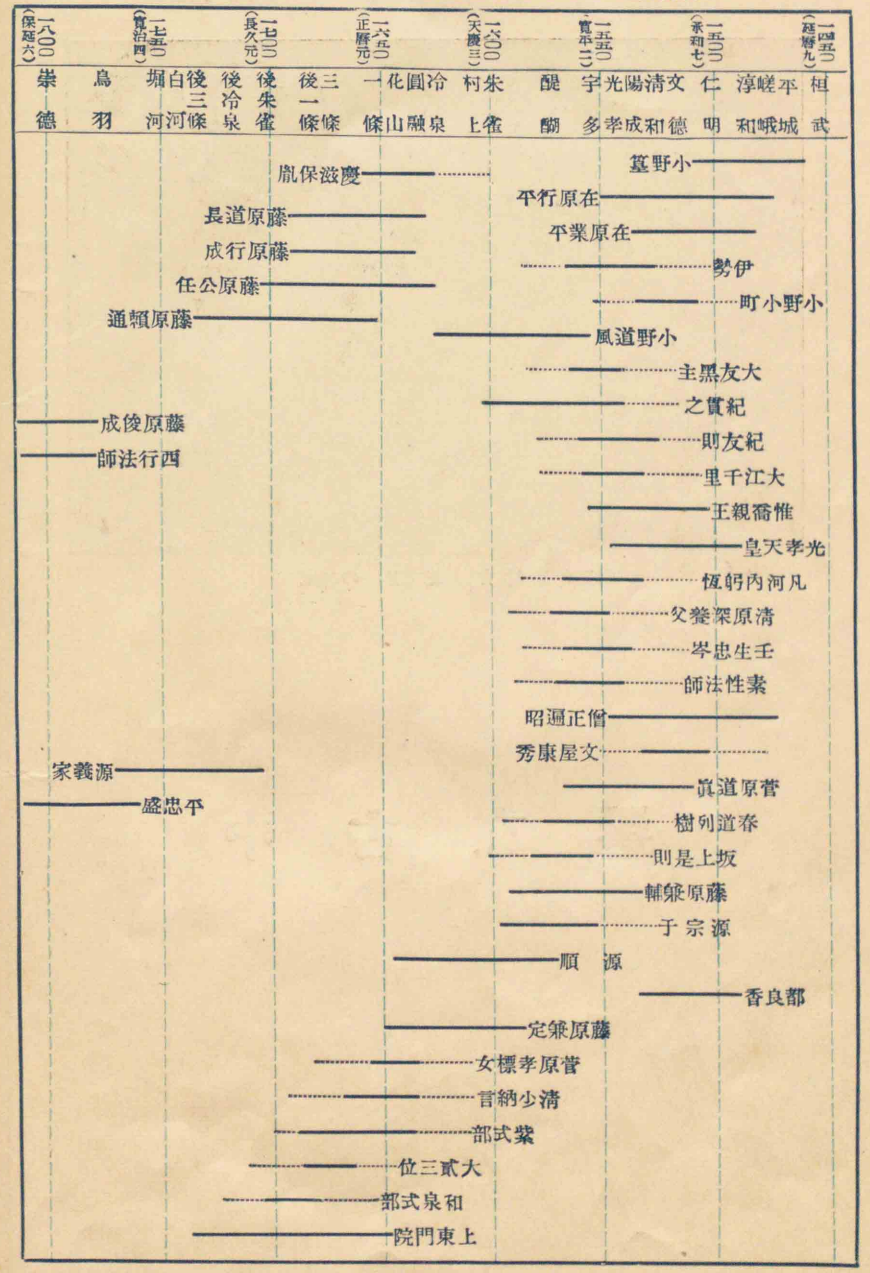
女院は、世を厭ふ御ならひと言ひながら、今かかる有樣を見え參らせむずらむ恥しさよ、消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵宵毎の閼伽の水、掬ぶ袂もしをるるに、曉起きの袖の上、山路の露も繁くして、しぼりやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましたる處に、內侍の尼まゐりつつ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御ならひ、何か苦しう候べき。早早御見參あつて、還御なし參らさせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて御見參ありけり。

（著者未詳「平家物語」による）

望の月夜（吉村忠夫筆）

中古文選

中古文學年表



一　かぐや姫

春の初より、(一)かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人「月の顔見るは忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、(二)人間には月を見てはいみじく泣き給ふ。

七月のもち(三)の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるる人人、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、ただ事にも侍らざんめり。いみじく思し歎く事あるべし。よくよく見奉らせ給へ。」といふを聞きて、翁かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うまし(四)き世に。」といふ。かぐや姫「月を見れば、世のなか心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐ

(一)竹取の翁が、竹の中から見出して拾つて來て、育て上げた美しい姫。但しもともと天女であるといふ、この物語の中心人物。
(二)「人の見ない隙」の意。
(三)十五日。
(四)「幸福な」といふ意味の古語。

や姫のある處にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」と問へば、「思ふ事もなし。物なむ心細く覺ゆる。」と答ふ。翁「月な見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ではあらむ。」とて、なほ月出づれば出でゐつつ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時時は打歎き泣きなどす。これを見て、仕ふるものども、「なほ物思す事あるべし。」とささや

竹取翁物語繪卷（圖書寮所藏）

(一)「わが本尊とも頼みにしてゐる人」といふ意。

けど、親を始めて、何事とも知らず。

八月もちばかりの月に出でゐて、かぐや姫、いといたく、人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く泣くいふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出(二)で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに、かの本の國より迎へに人人まうで來むず。さらず罷(三)りぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣く。

翁「こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしか

(二)「言葉に出す」「話す」などの意。

(三)「已むことなく」「仕方なく」などの意。

ど、菜種の大きさおはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。正に許さむや。」といひて、「われこそ死なめ。」とて泣きののしることいと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、ここにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、おのが心ならず罷りなむとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるる人人も、年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに美しかりつることを見ならひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。（中略）

かかる程に、宵うち過ぎて、子の刻ばかりに、家のあたり晝の明さ

（一）「馴れ」と同じ意。
（二）「大層善い」の意。
（三）「貴く上品で」の意。
（四）時の帝がこれを聞し召されて、八月十五日には、二千人の兵を竹取の翁の許に派遣し、家の内外を嚴重に固めて、若し天上から迎の者が來たら擊退するやうにと御命令になつた。

にも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりなり。大空より人雲に乘りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものに襲はるるやうにて、戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてむとすれども、手に力もなくなりて、痿えかがまりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外ざまへ往きければ、あれも戰はで、心地ただしれにしれて守りあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、「造麻呂まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、「汝をさなき人、いささかなる功德をつくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこらの年ごろ、そこ

翁と嫗とは姫を籠の内にかくし、固く戸を閉めて守つてゐた。
（五）今の午後十二時。
（六）「奮發して」の意。
（七）「氣丈な者」の意。
（八）「我慢して」「怀へて」などの意。
（九）「荒荒しくも」の意。
（一〇）「非常にぼけて」の意。
（一一）天人を指す。
（一二）薄絹を張つた天蓋。
（一三）竹取の翁の名。
（一四）「愚かな者よ」の意。
（一五）「多く」の意。

らの金賜ひて、身を換へたるが如なりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く能はぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢なき處にいかでか久しくおはせむ。」といふ。たて籠めたるところの戸、卽ちただ明きに明きぬ。格子どもも、人はなくして明きぬ。嫗の抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、「ここにも、心にもあらでかく罷るに、昇らむをだに見送り給へ。」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。われをば如何にせよとて、捨ててはて昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて臥せれば、御心惑ひぬ。文を書きおきて罷らむ。戀しからむをりをり、取出でて見給へ。」とて、打泣きて書くことばは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、返す返す本意なくこそ覺え侍れ。脫ぎおく衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。

と書きおく。

天人の中に持たせたる筥あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ。穢なき處のもの聞し召

(一) 急に金持になったことをいふ。
(二) 造麻呂の妻。
(三) 「自分でも」の意。

したれば、御心地あしからむものぞ。」とて、持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣を取出でて著せむとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て。」といふ。「衣著つる人は心異になるなりといふ。物一言いひ置くべき事ありけり。」といひて、文かく。天人「おそし。」と心もとながり給ふ。かぐや姫「物知らぬことな宣ひそ。」とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。（中略）

今はとて天の羽ごろもきるをりぞ君をあはれと思ひ出でぬる

とて、壺の藥そへて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつる事も失せぬ。（著者未詳「竹取物語」による）

（一）承平五年（一九五）正月。
（二）高知縣長岡郡に屬する古の地名。
（三）高知縣安藝郡奈半利村の古名。

二　旅路

一、宇多の松原

（一）九日。つとめて、大湊（二）より那波（三）の泊を追はむとて漕出でけり。これかれ互に、國の境の内はとて、見送りに來る人數多が中に、藤原言實・橘秀衡・長谷部行政等なむ、御館出で給ひし日より、ここかしこに追ひ來たる。この人人の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎゆくまにまに、海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にも言ふ事あるべし、舟にも思ふ事あれど、かひなし。かかれば、この歌をひとりごとにして已みぬ。

おもひやる心は海をわたれども ふみしなければ知らずや

あるらむ

かくて、(一)宇多の松原を過ぎゆく。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。もとごとに浪うち寄せ、枝ごとに鶴とび交ふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人の詠める歌、

見わたせば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、處を見るにえ勝らず。かくあるを見つつ漕ぎゆくまにまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取の心に委せつ。をのこもならはぬはいとも心細し。まして女は舟底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。

二、歸家

十六日。今日の夕つ方、京へのぼる。序に見れば、(二)山崎の店なる小櫃

(一)高知縣香美郡手結崎邊の海岸であらう。

(二)同年二月。

の繪も、勾餅の法螺の形も變らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、(三)島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。(五)桂川、月の明きにぞ渡る。人人のいはく、「この川、(六)飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、ある人の詠める歌

ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり

又ある人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川そでをひでても渡りぬるかな

(三)(四)京都府乙訓郡に屬する。

(五)京都府葛野郡を流れ、大堰川の下流。

(六)世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(「古今集」讀人知らず)

又ある人詠める、

かつら川わがこころにも通はねどおなじ深さに流るべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、處處も見えず。京に入りたちて嬉し。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たよりごとに物も絶えず得させたり。今宵かかる事と聲高に物も言はせず、いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や過ぎにけむ、かた枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。おほかた皆荒れにたれば、あはれとぞ人人いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてののしる。かかるうちに、猶かなしみに堪へずして、ひそかに心知れりける人といへりける歌。

生れしも歸らぬものをわが宿に小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、又かくなむ

見し人を松のちとせに見ましかば遠く悲しきわかれせましや

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え盡さず。とまれかくまれ、疾くやりてむ。（紀貫之著「土佐日記」による）

紀貫之　和歌・書道の大家。御書所預・越前少掾・大内記・右京亮・土佐守・木工權頭などに歴任。天慶九年（一九六）歿。「古今集」撰者の一人。

三　須磨の浦波

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠はれど、(一)行平の中納言の「(二)關吹きこゆる」といひけむ浦波、夜夜はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かかる處の秋なりけり。(三)御前にいと人少なにて、うち休み渡れるに、ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少し搔鳴らし給へるが、われながらいとすごう聞ゆれば、（中略）人人おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、(四)あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみ渡す。

(五)げに如何に思ふらむ、わが身ひとつにより、親はらから、片時立離

(一)在原氏。因幡守・中納言・民部卿・陸奥出羽按察使等に歷任。寛平五年（一五三）歿、年七十六。
(二)旅人のたもと涼しくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風（「續古今集」）
(三)「源氏物語」の主人公。光源氏の君の御前。
(四)「何とも言ひやうなく」の意。
(五)以下二行餘は、光源氏の君が、その側に仕へてゐる人の上を思ひやるのである。
(六)光源氏自身のふさいでゐる樣子を見て。
(七)筆も詞も及ばぬ。
(八)「似なく」「類なく」などの意。
(九)「なみなみならず」「一通りでなく」などの意。
(一〇)「なよらか」といふに同じい。

れ難く、程につけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれとたはぶれ言うち宣ひまぎらはし、つれづれなるまに、いろいろの紙を繼ぎつつ手習をし給ひ、珍しきさまなる唐の綾などに、さまざまの繪どもを描きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。人人の語り聞えし海山の有樣を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、なく描きあつめ給へり。

* * * * * *

前栽の花いろいろ咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひて、たたずみ給ふ御さまの、ゆゆしう清らなるに、ところがらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよよか

（一）「ゆるやか」といふに同じい。

須磨のわびずまひ（土佐光起筆）

なる御衣、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣に、帶しどけなく打亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、（一）ゆるらかに讀み給へるめでたさ、須磨わまた世に知らず聞ゆ。沖より、舟どもの謠ひののしりて漕ぎゆくなども、ほのかに聞えて、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、さまざま心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲、楫の音にまがへり。打ちながめ給ひて、御涙ぞこぼるる。

* * * *

三月の朔日に出で來たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は禊（みそぎ）し給ふべき。」と、なまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆかしくて出で給ふ。いとおろそかに軟障（ぜじやう）（二）ばかりを引きめぐらして、この國に通ひける陰陽師召して祓せさせ給ふ。海の面はうららと凪ぎわたりて、行くへも知らぬに、來し方ゆく先おぼし續けられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

と宣ふに、にはかに風吹きいでて、空もかき暮れぬ。御祓もしはてず立騷ぎたり。肱笠雨（三）とか降り來て、いとあわただしければ、皆歸り給ひなむとするに、笠も取りあへず、さる心もなきに、よろづ吹散らし、またなき風なり。波いと嚴めしう立ち來て、人人の足も空なり。海の面は衾を引張りたらむやうに光り滿ちて、神鳴りひらめく。落ちか

（二）幕の如き物。

（三）俄雨。

かる心地していといみじ。辛うじてたどり來て、「まだかかる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり。」と惑ふに、神なほ止まず鳴り滿ちて、雨の脚あたるところ、徹りぬべくはらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと、心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす。

（一）ばらばらと強く雨の降りそそぐこと。

暮れぬれば、神少し鳴り止みて、風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。「今しばしかくだにあらば、波に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、取りあへず人そこなはるるとは聞けど、いとかかる事はまだ知らず。」と言ひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいささか寢入り給ふ。

* * * * * *

その又の日の曉より、風いみじう吹き、潮高う滿ちて、波の音荒き

こと、巖も山も殘るまじき氣色なり。神の鳴り閃くさま、更にいはむ方なくて、落ちかかりぬと覺ゆるに、ある限さかしき人なし。「われらかなしき妻子の顏をも見で死ぬべきこと。」と歎く。君は御心を鎭めて、何ばかりの過にてか、この渚に命をば極めむと、强う思しなせど、いと物騷がしければ、いろいろのみてぐら（二）捧げさせ給ひて、「住吉の神、近き境を鎭め守り給へ。まことに迹を垂れ給ふ神ならば、助け給へ。」と多くの大願を立て給ふ。

（二）神に奉る物。

各〻みづからの命をばさるものにて、かかる御身の、またなき例に沈み給ひぬべき事の、いみじう悲しきに、心を起して、少し物覺ゆる限は、身に代へてこの御身一つを救ひ奉らむと、（三）とよみて諸聲に神佛を念じ奉る。帝王の深き宮に養はれ給ひて、いろいろの樂しみに

（三）「聲高く騷いで」の意。

奢り給ひしかど、深き御慈しみ、大八洲に普く、沈める輩をこそ多く浮べ給ひしか。今何の報にか、(一)ここら横ざまなる波風にはおぼほれ給はむ。天地ことわり給へ。罪なくて罪に當り、官位を取られ、家を離れ、境を去りて、あけくれ安き空なく歎き給ふに、かく悲しき目をさへ見、命盡きなむとするは、前の世の報か、この世の犯しか、神佛明かにましまさば、この愁やすめ給へ。」と、御社の方に向きて、さまざまの願を立て、また海の中の龍王、よろづの神たちに願立てさせ給ふに、いよいよ鳴り轟きて、おはしますに續きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて、廊は燒けぬ。心魂なくて、あるかぎり惑ふ。後の方なる大炊殿と思しき屋に移し奉りて、上下となく立込みて、いとらうがはしく泣きとよむ聲、雷にも劣らず。空は墨を磨りたるやうにて、日も暮れにけり。

(一)「ひどい」「大變な」などの意。
(二)「溺れ」の意。
(三)「亂りがはしく」「騷騷しく」などの意。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、このおましの處のいと珍かなるもいとかたじけなくて、寢殿に移し奉らむとするに、燒け殘りたる方も疎ましげに、そこらの人の踏みとどろかし惑へるに、御簾などもみな吹散らしてけり。夜を明かしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦し給ひて、思しめぐらすに、いと心あわただし。月さし出でて、潮の近く滿ち來ける痕もあらはに、名殘なほ寄せかへる波荒きを、柴の戸おしあけてながめおはします。

あやしき海士どもの、たかき人おはするところとて集まりまゐりて、聞きも知り給はぬ事どもをさへづり合へるも、いとめづらかなれど、え逐ひも拂はず。「この風今暫し止まざらましかば、潮のぼりて殘るところなからまし。神の助おろかならざりけり。」と言ふを聞き給ふも心細し。（紫式部著「源氏物語」による）

(四)「鎭まる」「衰へゆく」などの意。
(五)「恐おほい」「勿體ない」などの意。
(六)數の多いこと。

紫式部　式部丞藤原爲時の女。藤原宣孝の妻。上東門院に仕へて、博學と歌文の才と貞淑の評とが高かつた。

（一）藤原公任。關白頼忠の子。詩歌管絃の達人。「和漢朗詠集」の撰者。長久二年（一〇四一）歿、年七十六。
（二）藤原兼家。關白太政大臣。頼忠の從弟。正暦元年（一六五〇）歿、年六十二。
（三）關白藤原道隆。兼家の長子。長德元年（一六五五）歿、年四十九。
（四）藤原道兼。兼家の次子。關白に至る。正暦五年（一六五四）歿、年三十五。
（五）藤原道長。兼家の第五子。攝政關白太政大臣に歷任。世に御堂關白といふ。萬壽四年（一六八七）歿、年六十二。

四　けづり屑

（一）四條大納言の何事もすぐれ、めでたくおはしますを、（二）大入道殿、「いかでかからむ。羨しくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。」と申させ給ひければ、中（三）關白殿・粟田殿（四）などは、げにさもやおぼすらむと恥しげなる御氣色にて、物ものたまはぬに、この入道（五）殿はいと若うおはしますし御身にて、「影をば踏まで、面（六）をやは踏まぬ。」とこそ仰せられけれ。まことにこそ、さおはしますめれ。内大臣殿をだに近くえ見奉り給はぬよ。

さるべき人は、疾うより御心魂の猛く、御守りもこはきなめりと覺え侍るは。花山院の御時に、五月下つ闇に、五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきだれ、雨の降る夜、御門さうざうしくや思し召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人人ものがたりし給ひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに、けしき覺ゆ。まして物ばなれたる處など如何ならむ。さあらむ處に一人往なむや。」と仰せられけるに、「え罷らじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなむ。」と申し給ひければ、さる處おはします御門にて、「いと興ある事なり。さらば往け。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ往け。」と仰せられければ、よその君だちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又、承り給へる殿ばらは御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉（八）上にまれ、瀧（七）口にまれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には一人入り侍らむ。」

（六）禁中の雜役に仕へるもの。
（七）清涼殿の瀧口といふ處に候してゐる身分の低い武士。

と申し給へば「證なきこと。」と仰せらるるに、「げに。」とて、御手箱に置かせ給へる小刀申して立ち給ひぬ。今二ところも、にがむ、にがむ、各〻おはさうじぬ。

子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。」と、それをさへ分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原の程に、そのものともなき聲どもの聞ゆるに、術なくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外までわななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面のみぎりの程に、簷と等しき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えで、「身の候はばこそ仰言も承らめ。」とて、各〻歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思し召す程にぞ、いとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へる。「如何に如何に。」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたる物を取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、「ただにて歸り參りて侍らむは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南表の柱のもとを削りて取りて候なり。」とつれなく申し給ふに、いと淺ましう思し召さる。こと殿だちの御氣色は如何にも猶なほらでこの殿のかくて參り給へるを、御門より始め感じののしられ給へど、羨しきにや、又如何なるにか、物も言はでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、「けづり屑を番はして見よ。」と仰言ありければ、もて行きおしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。そのけづり跡はいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は、なほ淺ましきことにぞ申ししかし。（著者未詳「大鏡」による）

（一）「おはします」の古語。
（二）今の午前二時少し前。
（三）今の午前二時。
（四）宜秋門の内。
（五）豐樂院の北手の空地。

紀貫之　本卷一二一頁既出。

すかはらの
あそん
秋かぜのふきあけにたてるしらきくは花かあらぬかなみのよするか

壬生忠岑　歌人。右衞門府生・御厨子所預・攝津大目に歷任。「古今集」撰者の一人。

五　心の花

紀貫之

○

春立ちける日よめる

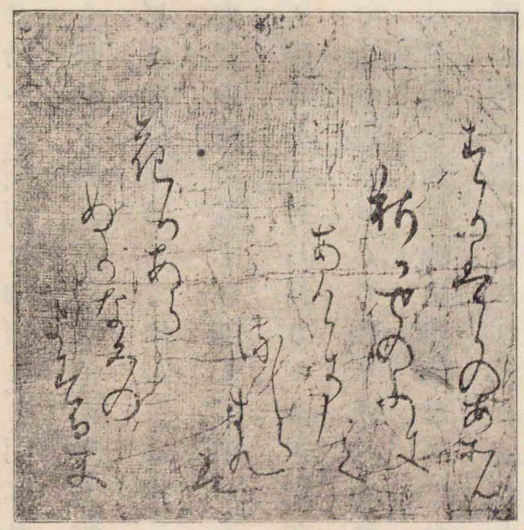
袖ひぢて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

○

春のはじめの歌

壬生忠岑

春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ



傳紀貫之筆蹟

○

仁和の御門みこにおはしましける時人に若菜たまひける御歌

君がため春の野に出でて若菜つむわがころもでに雪は降りつつ

○

初瀨に詣づる毎に宿りける人の家に久しく宿らで程へて後にいたれりければかの家の主かく定かになむ宿りはあるといひ出して侍りければ其處にたてりける梅の花を折りてよめる　紀貫之

人はいさこころも知らずふるさとは花ぞむかしの香ににほ

（一）光孝天皇。仁和は光孝天皇と宇多天皇との二代に亘る間の年號。（一五四五―一五四九）

（二）奈良縣磯城郡に屬する町。附近に初瀨山あり、初瀨川あり、又長谷寺あり、古來靈地として、又春花秋葉の美景の地として有名である。

ひける

○

(一)寛平の御時后の宮の歌合の歌　素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひのそでにとまれる

○

(二)亭子院の歌合の時によめる　伊勢

見る人もなき山里のさくらばなほかの散りなむのちぞ咲かましし

○

櫻の花の散るをよめる　紀友則

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづごころなく花の散るらむ

(一)宇多天皇の御代の年號。（一八八九―一八九九）

素性法師　歌僧。俗名良峯玄利。左近將監たり、後出家して雲林院・良因院などに住んだ。

(二)宇多天皇の院號。

伊勢　伊勢守藤原繼蔭の女。宮中に仕へてゐたが、宇多天皇の御讓位になると同時に退いた。

紀友則　歌人。土佐掾・大内記等に歴任。「古今集」撰者の一人。

○

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬこころもてなにかは露を玉とあざむく

○

月の面白かりける夜曉方によめる　清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

○

(三)是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見れば千千に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあ

僧正遍昭　歌僧。素性法師の父。俗名は宗貞。藏人頭に任ぜられてゐたが、仁明天皇の崩御を悲しんで遁世した。寛平二年（一八九〇）寂、年七十五。

清原深養父　歌人。延喜・延長頃の人。

(三)光孝天皇の第二皇子。

大江千里　歌人。延喜頃の人。

藤原敏行　歌人。清和・宇多兩朝に仕へ、藏人頭・右兵衛督等に歴任。昌泰四年（一八九一）歿。

文屋康秀　歌人。清和・陽成の兩朝に仕へ、縫殿助に任ぜられた。

（一）奈良縣山邊郡にある地名で、今は丹波市町の内に屬する。

らねど

藤原敏行

○

秋の夜の明くるも知らず鳴く蟲はわがごとものや悲しかるらむ

文屋康秀

○

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜを嵐といふらむ

○

仁和の御門みこにおはしましける時ふるの瀧御覽ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりて御物語の序によみて奉りける

僧正遍昭

凡河内躬恒　歌人。貫之・忠岑などと肩を並べた。醍醐天皇の殊寵を被つた。「古今集」撰者の一人。

在原業平　歌人。阿保親王の第五子。右近衛中將に任じ、元慶四年（一八八〇）歿、年五十六。

（二）淸和天皇の皇后。

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

○

白菊の花をよめる

凡河内躬恒

こころあてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花

○

（三）二條の后の東宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる

在原業平

ちはやぶる神代も聞かず龍田川からくれなゐに水くくるとは

源宗于 是忠親王の子。右京大夫。天慶三年（九四〇）歿。

春道列樹 歌人。延喜二十年（一五四〇）壹岐守に任ぜられた。

小野篁 學者。遣唐副使に任ぜられ、大使藤原常嗣と合はず、隱岐に流され、後赦された。仁壽二年（一五三五）歿、歿年五十一。

○

冬の歌とてよめる　源宗于

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬとおもへば

○

年のはてによめる　春道列樹

昨日といひ今日とくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

○

隱岐の國に流されける時に船に乘りて出でたつとて京なる人の許に遣はしける　小野篁

わたの原やそ島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまのつり舟

在原行平 本卷一二二頁既出。

菅原道眞 字多・醍醐の兩朝に仕へ、右大臣に進む。太宰權帥に左遷され、延喜三年（一五六三）配處に於て歿、年五十九。

○

題しらず　在原行平

たちわかれいなばの山の嶺に生ふるまつとし聞かば今かへり來む

○

朱雀院奈良におはしましける時に手向山にてよめる　菅原道眞

このたびは幣も取りあへず手向山もみぢのにしき神のまに

（「古今和歌集」による）

新撰國語讀本 昭和二版 卷九 終

新撰國語讀本昭和二版（全十册）

定價	
卷一・二	各六拾五錢
卷三・四	各六拾貳錢
卷五・六	各五拾六錢
卷七・八	各五拾參錢
卷九・十	各五拾錢

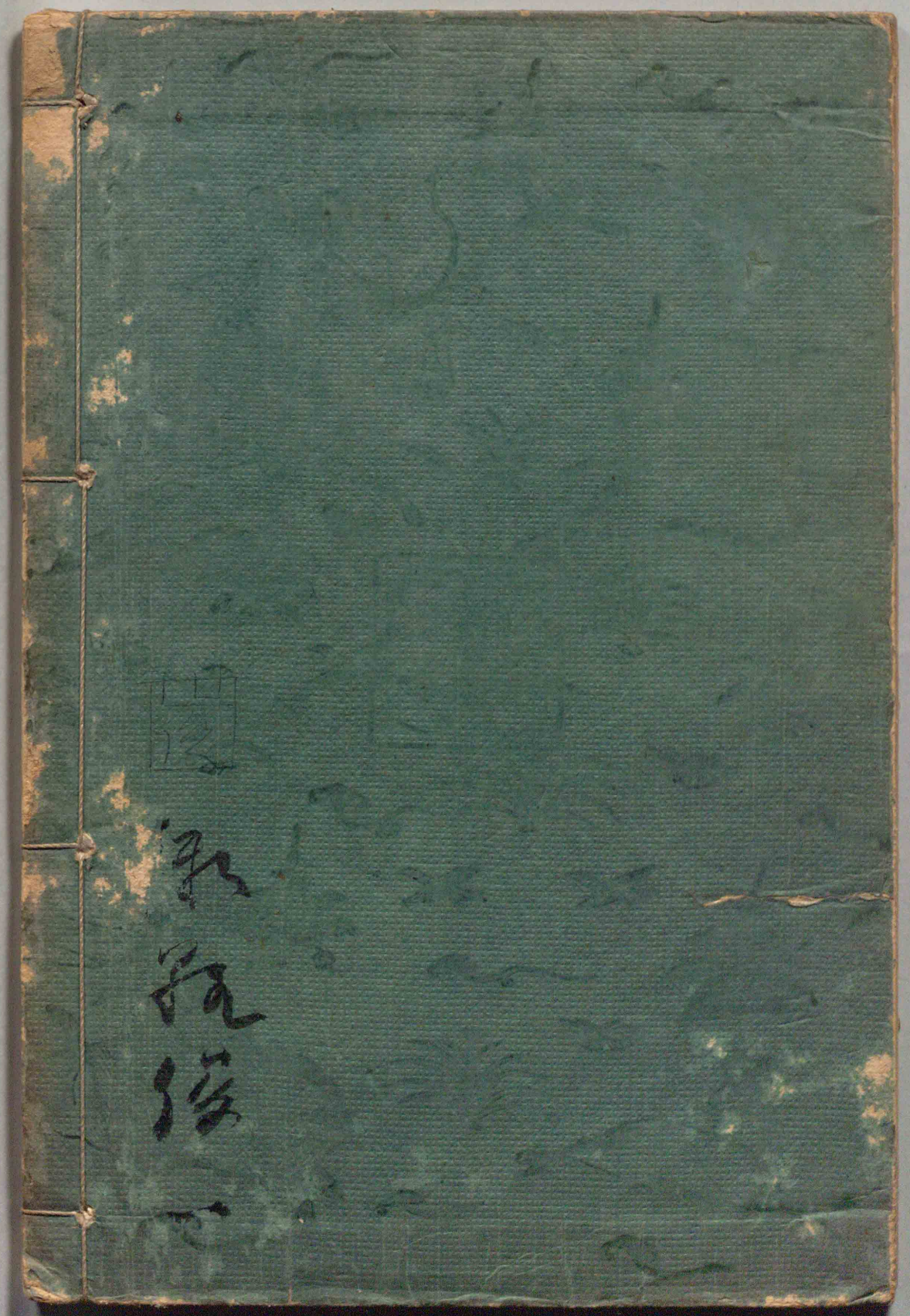
昭和六年九月十九日印刷
昭和六年九月二十三日發行
昭和七年二月二日訂正印刷
昭和七年二月六日訂正發行

編者 佐々政一
補修者 武島又次郎
補修者 笹川種郎
補修者 杉敏介

發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社明治書院 取締役社長 三樹退三

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替貯金口座東京四九九一番 株式會社明治書院 電話神田(25)二六九五・二六九六

不許複製


教說後一